

日本経済・関西経済の現況と予測

第143回 景気分析と予測
&

Kansai Economic Insight Quarterly No.64

2023年5月30日

アジア太平洋研究所 研究統括兼数量経済分析センター長
甲南大学 経済学部名誉教授
稲田 義久

マクロ経済分析プロジェクト

Outline

1. Executive summary p.3

2. 「第143回 景気分析と予測」の概要

- 予測の要旨 p.5-6
- 日本経済の現況 p.7-16
- 予測結果の解説 p.17-24

3. 「Kansai Economic Insight Quarterly No.64」の概要

- 予測の要旨 p.26-27
- 関西経済の現況 p.28-35
- 予測結果の解説 p.36-39

4. トピックス

- 関西2府4県GRPの早期推計 p.40
- 急回復するインバウンド需要と関西経済 p.41-42

【日本経済予測の要旨】

サービス消費支出中心の回復と海外経済減速の引き合い

実質GDP成長率予測：23年度+0.9%、24年度+1.4%

【関西経済予測の要旨】

消費の復元を起点として好循環に向かう関西経済

景気は足下改善、先行きも改善を見込む

【参考】 前回予測の要旨

- 日本経済「強まるインフレと海外経済減速の影響」
- 関西経済「内需を中心に緩やかな持ち直しの動き続く」

第143回 景気分析と予測 日本経済予測資料

マクロ経済分析プロジェクト Contributors

APIR研究統括兼数量経済分析センター長・

甲南大学経済学部名誉教授 稲田義久

日本アプライドリサーチ研究所主席研究員 下田充



【QRコードより
本予測説明動画が5/30から
視聴可能予定】

予測の要旨

サービス消費支出中心の回復と海外経済減速の引き合い

実質GDP成長率予測：23年度+0.9%、24年度+1.4%

1. GDP1次速報によれば、**23年1-3月期実質GDPは前期比年率+1.6%増加し3四半期ぶりのプラス成長**だが、均してみれば回復は緩やか。足下はピークから依然**1.5%低い**。民間最終消費支出、民間資本形成の回復の遅れが主要因。一方、**インバウンドの急回復もありサービス輸出はほぼ戻りつつある**。今後は社会経済活動の正常化からサービス消費中心の回復が期待できる
2. 実質GDP成長率(前期比+0.4%)への寄与度を見ると、**国内需要+0.7%ポイントと2四半期ぶりのプラス**。民間最終消費支出、民間住宅、民間企業設備がいずれも増加。一方、**純輸出同-0.3%ポイントと2四半期ぶりのマイナス**
3. 交易条件が2四半期連続で改善したため、国内総所得(GDI)成長率は前期比年率+4.0%となり、**実質GDPの伸び(同+1.6%)を2四半期連続で上回った**

予測の要旨

4. 1-3月期GDP1次速報と新たな外生変数の想定を織り込み、23-24年度日本経済の見通しを改定。**実質GDP成長率を23年度+0.9%、24年度+1.4%と予測**。前回から**23年度は据え置き、24年度-0.1%ポイント下方修正**
5. 社会経済活動の正常化により、**23年度はサービス消費中心の回復が期待**。一方、**23年度前半の海外経済の低迷により純輸出のマイナス寄与は避けられず、また民間需要の寄与度が前年から低下すると予測**。このため、**実質GDPがコロナ禍前のピークを超えるのは24年7-9月期以降**。**回復に5年(20四半期)を要する**。リーマンショックは回復に22四半期を要した
6. 足下、エネルギー価格は下落に転じたが、再び値上げが予定されており、消費者物価指数基調のかく乱要因。賃金の動きに連動するサービス価格の上昇もあり、**インフレ率は23年度前半には3%台で推移、後半は原材料高と円安は落ち着きを見せ減速**。**消費者物価コア指数のインフレ率を、23年度+2.5%、24年度+1.3%と予測**。23年度を+0.3%ポイント上方修正

1-3月期:回復力を欠く三四半期ぶりのプラス成長

実質GDPと項目の成長率(前期比、%)

| | GDP年率 | GDP | 国内需要 | 民間需要 | 民間最終消費支出 | 民間住宅 | 民間企業設備 | 民間在庫変動 | 公的需要 | 政府最終消費支出 | 公的固定資本形成 | 公的在庫変動 | 純輸出 | 輸出 | 輸入 | GDI |
|------|-------|------|------|------|----------|------|--------|--------|------|----------|----------|--------|------|-------|------|------|
| | 年率 | | 寄与度 | 寄与度 | | | | 寄与度 | 寄与度 | | | | 寄与度 | 寄与度 | | |
| 19Q2 | 1.2 | 0.3 | 0.5 | 0.3 | 0.1 | 1.5 | -0.5 | 0.3 | 0.2 | 0.5 | 0.7 | 0.0 | -0.2 | 0.5 | 1.4 | 0.2 |
| 19Q3 | 1.1 | 0.3 | 0.6 | 0.4 | 0.9 | 0.8 | 2.2 | -0.5 | 0.2 | 0.9 | -0.1 | 0.0 | -0.3 | 0.4 | 2.1 | 0.3 |
| 19Q4 | -10.6 | -2.8 | -2.9 | -3.0 | -3.5 | -2.1 | -7.2 | 0.2 | 0.1 | 0.3 | -0.1 | 0.0 | 0.1 | -1.3 | -1.9 | -2.7 |
| 20Q1 | 1.7 | 0.4 | 0.5 | 0.5 | 0.6 | -5.0 | 4.7 | -0.4 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | -0.1 | -4.7 | -4.1 | 0.6 |
| 20Q2 | -28.3 | -8.0 | -5.2 | -5.4 | -8.8 | 0.4 | -7.0 | 0.4 | 0.2 | 0.0 | 4.0 | 0.0 | -2.8 | -17.3 | -0.7 | -6.9 |
| 20Q3 | 24.7 | 5.7 | 2.8 | 2.3 | 5.5 | -4.8 | -0.2 | -0.5 | 0.5 | 2.3 | 0.1 | 0.0 | 2.8 | 9.8 | -7.3 | 5.4 |
| 20Q4 | 7.7 | 1.9 | 1.4 | 1.2 | 2.0 | -0.2 | 1.5 | -0.1 | 0.2 | 0.8 | 1.6 | 0.0 | 0.5 | 9.5 | 6.1 | 1.8 |
| 21Q1 | -0.7 | -0.2 | -0.3 | -0.3 | -1.7 | 1.4 | 1.6 | 0.4 | 0.0 | -0.1 | -0.3 | 0.0 | 0.1 | 2.7 | 1.9 | -0.8 |
| 21Q2 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | 0.3 | 0.3 | 1.5 | 1.4 | -0.1 | 0.3 | 1.9 | -2.1 | 0.0 | -0.2 | 3.1 | 4.7 | 0.0 |
| 21Q3 | -1.3 | -0.3 | -0.5 | -0.6 | -1.1 | -1.7 | -1.7 | 0.3 | 0.1 | 1.3 | -3.0 | 0.0 | 0.2 | -0.4 | -1.5 | -1.1 |
| 21Q4 | 4.7 | 1.2 | 1.1 | 1.5 | 3.2 | -1.2 | 0.5 | -0.1 | -0.4 | -1.1 | -2.9 | 0.0 | 0.0 | 0.5 | 0.4 | 0.4 |
| 22Q1 | -1.9 | -0.5 | 0.0 | 0.0 | -1.1 | -1.8 | -0.2 | 0.7 | -0.1 | 0.7 | -4.0 | 0.0 | -0.5 | 1.2 | 3.7 | -0.8 |
| 22Q2 | 4.7 | 1.1 | 1.1 | 0.9 | 1.7 | -1.8 | 2.1 | -0.3 | 0.2 | 0.7 | 0.6 | 0.0 | 0.1 | 1.5 | 1.0 | 0.5 |
| 22Q3 | -1.0 | -0.2 | 0.4 | 0.4 | 0.1 | -0.5 | 1.5 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 1.1 | 0.0 | -0.6 | 2.5 | 5.6 | -1.0 |
| 22Q4 | -0.1 | 0.0 | -0.4 | -0.5 | 0.2 | 0.1 | -0.7 | -0.5 | 0.1 | 0.2 | 0.2 | 0.0 | 0.4 | 2.0 | 0.0 | 0.2 |
| 23Q1 | 1.6 | 0.4 | 0.7 | 0.6 | 0.6 | 0.2 | 0.9 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 2.4 | 0.0 | -0.3 | -4.2 | -2.3 | 1.0 |

注：国内需要、民間需要、公的需要、在庫変動と純輸出は寄与度。

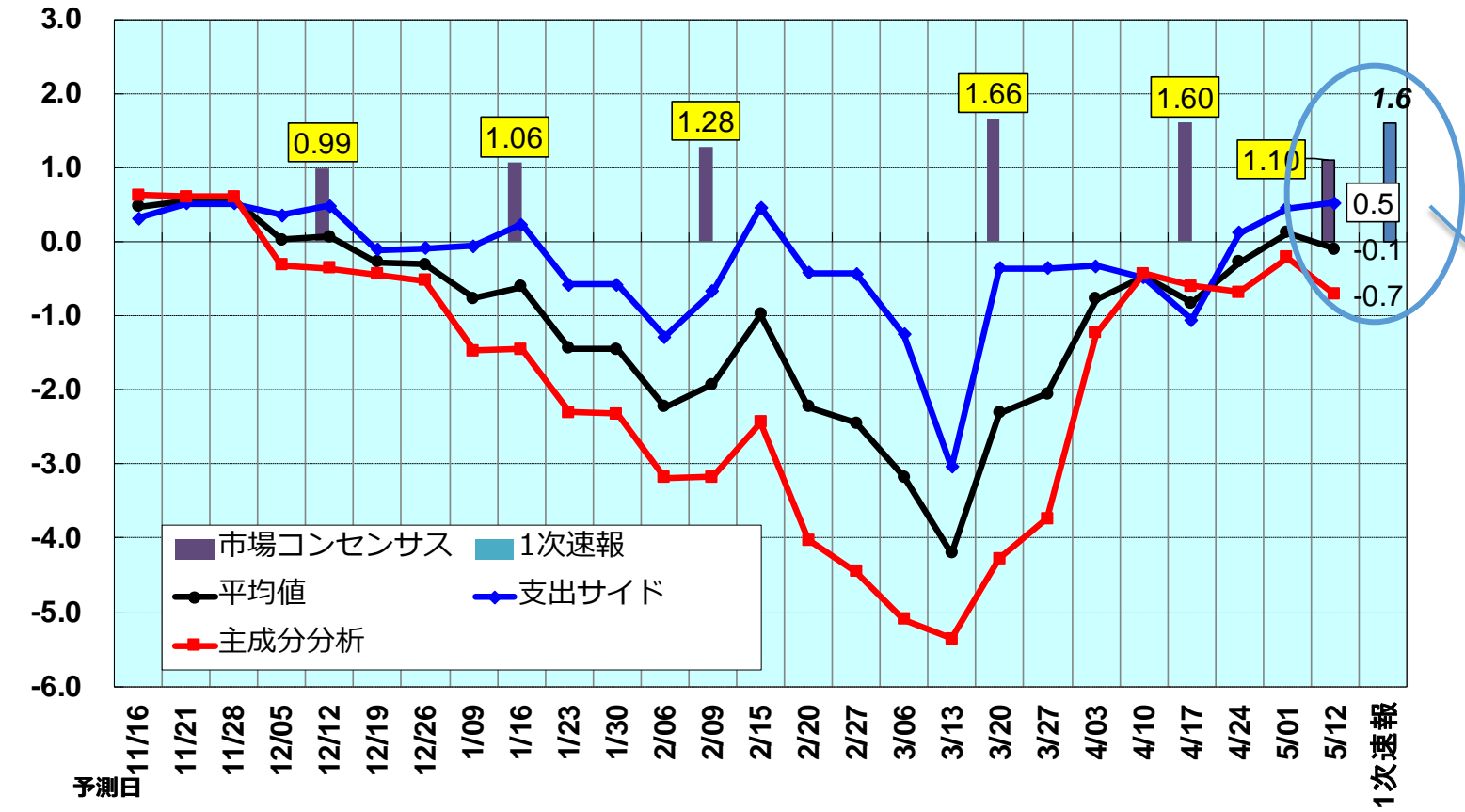
出所：内閣府『国民経済計算』よりAPIR作成

■ 2023年1-3月期の実質GDP成長率(前期比+0.4%)への寄与度を見ると、**国内需要**は同+0.7%ポイントと2四半期ぶりのプラス。民間最終消費支出、民間住宅、民間企業設備がいずれも増加。公的需要は同+0.1%ポイントと4四半期連続のプラス寄与。一方、**純輸出**は同-0.3%ポイントと2四半期ぶりのマイナス寄与

■ **交易条件が2四半期連続で改善したため**、国内総所得(GDI)成長率は前期比+1.0%となり、実質GDPの伸び(同+0.4%)を2四半期連続で上回った

2023年1-3月期超短期予測の動態

超短期予測の動態：実質GDP成長率、2023Q1(前期比年率：%)



- 2023年1-3月期実質GDP成長率は、市場コンセンサスの最終予測(前期比年率+1.10%)やCQM最終予測(支出サイド：同+0.5%)から上振れた
- 実質GDPは前期比年率+1.6%増加し三四半期ぶりのプラス成長だが、均してみれば回復は緩やか。半期ベースでは、22年度前半の回復に対して、後半はほぼ横ばい

本予測はペンシルバニア大学クライン名誉教授によって開発された超短期モデル(Current Quarter Model)のアイデアを日本経済に適用したものである。本予測システムでは、毎週発表されたデータの景気への影響を調べることができる。予測は支出サイド、生産サイド(主成分分析)の2つのモデルを用いて行われ、前者の予測値を主要系列とし、後者の予測値と両モデルの予測平均値を参考系列としている。

出所：APIR『第143回 景気分析と予測』

実績と予測：項目別比較

- 民間最終消費支出(前期比+0.6%)をCQM(前期比-0.1%)は過少に予測。民間最終消費支出を近似する総消費動向指数は前期比-0.1%と低調であったことからすれば意外な感がある
- 民間企業設備(同+0.9%)についても、コンセンサス(同+0.06%)、CQM(同-2.8%)ともに過少に予測した
- 一方純輸出は幾分過大予測となった。**民間最終消費支出と民間企業設備の過少予測が、実質GDP成長率予測が実績を下回った主たる要因**

超短期予測と実績 2023年1-3月期

前期比：%

| | 予測 | 1次速報 | コンセンサス |
|-------------|------|------|--------|
| 国内総生産/国内総支出 | 0.1 | 0.4 | 0.26 |
| 前期比年率 | 0.5 | 1.6 | 1.10 |
| 民間最終消費支出 | -0.1 | 0.6 | 0.39 |
| 民間住宅 | 0.4 | 0.2 | |
| 民間企業設備 | -2.8 | 0.9 | 0.06 |
| 民間在庫変動(*) | 0.3 | 0.1 | |
| 政府最終消費支出 | 0.4 | 0.0 | |
| 公的固定資本形成 | 2.6 | 2.4 | |
| 公的在庫変動(*) | 0.0 | 0.0 | |
| 純輸出(*) | 0.1 | -0.3 | |
| 財貨・サービスの輸出 | -2.4 | -4.2 | -1.76 |
| 財貨・サービスの輸入 | -3.0 | -2.3 | -1.02 |
| GDPデフレーター | 2.2 | 1.3 | |
| 国内需要 | 0.0 | 0.7 | |
| 民間需要 | -0.3 | 0.8 | |

*印は寄与度

出所：CQMはQUICK『GDPトラッカーレポート日本経済超短期予測(CQM)』、2023年5月12日。コンセンサスはJCER、『ESPフォーキャスト調査』、2023年5月15日

回復過程：依然コロナ禍前のピークから-1.5%低いが...

(単位：2019年7-9月期=100)

| | 国内総生産 | 財貨輸入 | サービス 輸入 | 民間最終 消費支出 | 民間資本 形成 | 政府支出 | 財貨輸出 | サービス 輸出 |
|-------------|-------|-------|------------|--------------|------------|-------|-------|------------|
| 19Q3 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 19Q4 | 97.2 | 98.7 | 96.1 | 96.6 | 94.6 | 100.3 | 98.3 | 100.2 |
| 20Q1 | 97.7 | 93.9 | 94.9 | 97.3 | 95.2 | 100.4 | 95.6 | 88.6 |
| 20Q2 | 89.9 | 94.8 | 89.0 | 89.1 | 91.5 | 101.1 | 78.1 | 76.8 |
| 20Q3 | 95.0 | 87.1 | 84.9 | 94.0 | 88.4 | 103.1 | 88.9 | 73.3 |
| 20Q4 | 96.7 | 94.3 | 84.3 | 95.8 | 88.8 | 104.0 | 98.8 | 75.0 |
| 21Q1 | 96.6 | 96.3 | 85.6 | 94.1 | 92.1 | 103.9 | 101.0 | 78.9 |
| 21Q2 | 96.9 | 99.2 | 93.9 | 94.3 | 92.9 | 105.0 | 104.5 | 80.1 |
| 21Q3 | 96.6 | 98.3 | 91.1 | 93.3 | 92.9 | 105.5 | 103.8 | 80.6 |
| 21Q4 | 97.7 | 99.2 | 90.1 | 96.1 | 92.4 | 104.0 | 104.6 | 80.1 |
| 22Q1 | 97.2 | 102.9 | 92.4 | 95.1 | 95.3 | 103.7 | 106.7 | 78.2 |
| 22Q2 | 98.3 | 104.9 | 90.7 | 96.7 | 95.2 | 104.4 | 107.5 | 82.3 |
| 22Q3 | 98.1 | 106.8 | 108.0 | 96.7 | 96.8 | 104.5 | 109.4 | 86.9 |
| 22Q4 | 98.1 | 108.4 | 102.2 | 96.9 | 93.9 | 104.9 | 110.1 | 94.1 |
| 23Q1 | 98.5 | 104.1 | 107.5 | 97.5 | 95.1 | 105.3 | 103.0 | 99.3 |

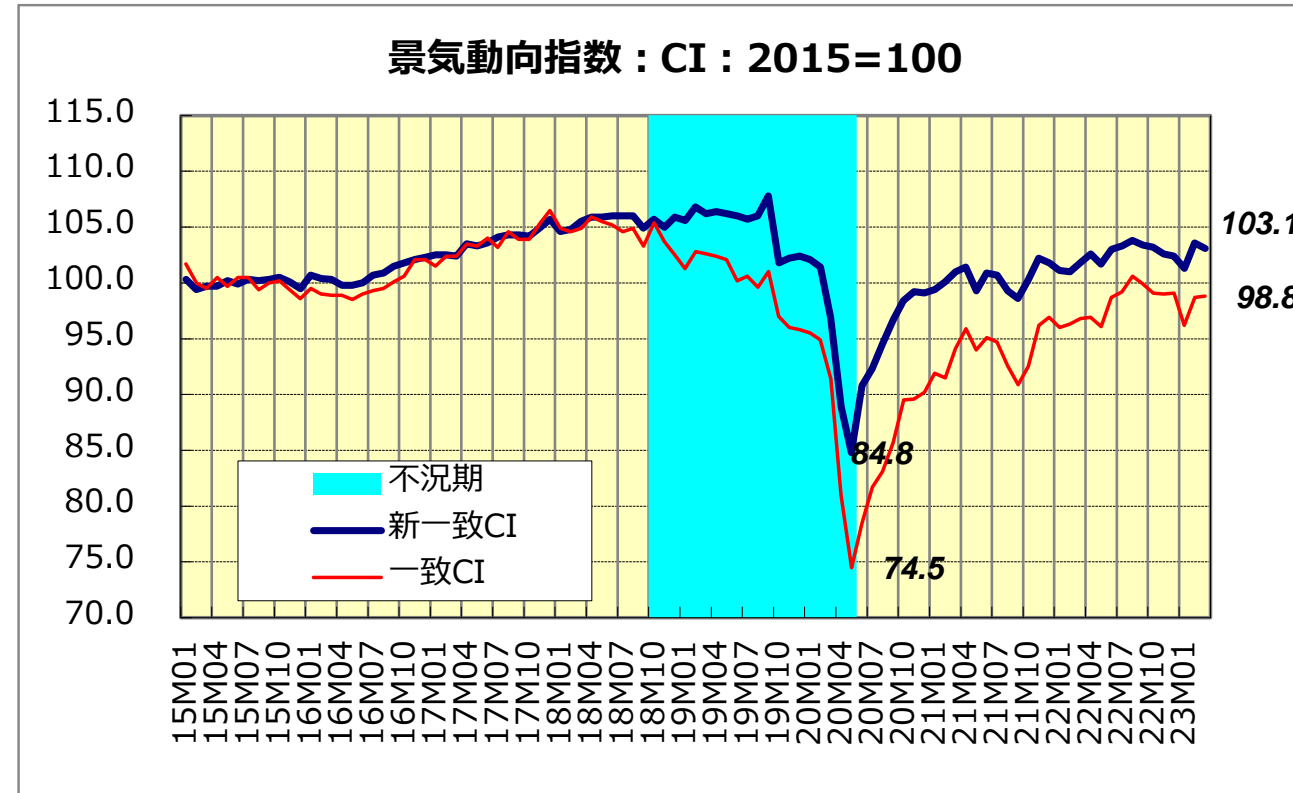
- コロナ禍前のピーク(19年7-9月期)からの回復過程をみれば、
- 23年1-3月期のGDPの水準は、**ピークから依然-1.5%低い**
- 民間最終消費支出(-2.5%)、民間資本形成(-4.9%)の回復が遅れている
- インバウンドの回復もあり、**サービス輸出は急回復**

出所：内閣府『国民経済計算』よりAPIR作成

基調判断は「足踏みを示している」

- **3月の景気動向一致指数(確報)**は98.8となり前月差+0.1ポイント上昇。2カ月連続のプラス。政府は**基調判断を「足踏みを示している」と前月から据え置き**。結果、1-3月期平均(97.9)は10-12月期平均から-1.2ポイント低下。**2四半期連続の低下**
- サービス活動をも考慮した**新一致指数(参考指標)**は、3月に103.1となり前月差-0.5ポイント低下して2カ月ぶりの下降。**1-3月期平均**は102.7となり10-12月期平均差-0.1ポイント低下し、**2四半期連続の低下**

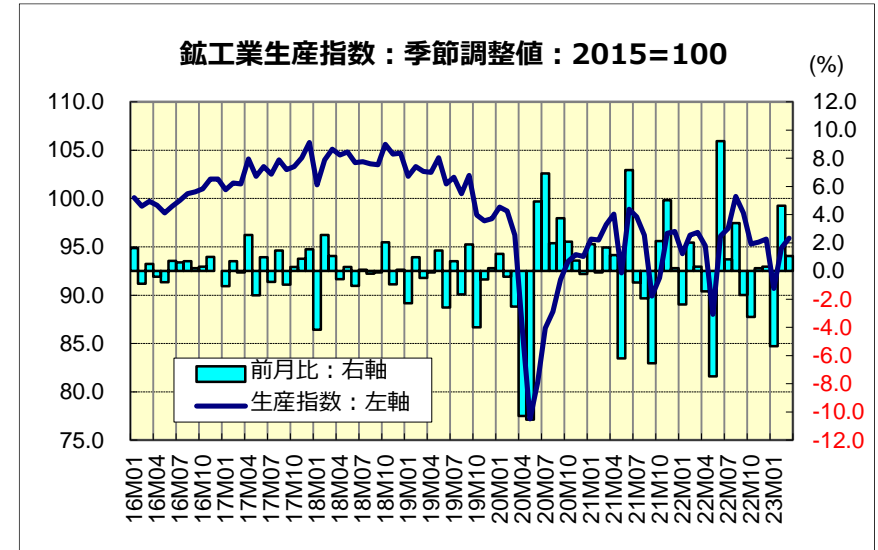
【CI一致指数の動向】 (2015=100)



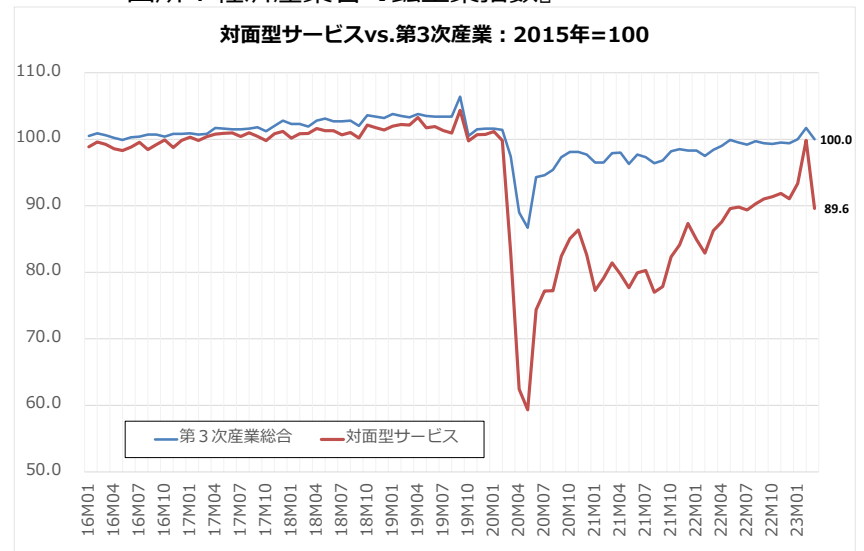
出所：内閣府『景気動向指数』より作成

1-3月期の生産は2四半期連続のマイナス

- 3月の**鉱工業生産指数**(確報)は前月比+1.1%と2カ月連続の上昇。1月の落ち込みが大きかったため、**1-3月期は前期比-1.8%**と**2四半期連続のマイナス**(10-12月期：同-3.0%)
- 3月の**第3次産業活動指数**は前月比-1.7%と3カ月ぶりの低下。結果、**1-3月期は前期比+1.2%**上昇し、**3四半期ぶりのプラス**。経産省は基調判断を「持ち直し傾向にある」と前月から据え置いた
- **1-3月期の対面型サービス業指数**は前期比+3.1%上昇し、**6四半期連続のプラス**となった(10-12月期：前期比+1.3%)



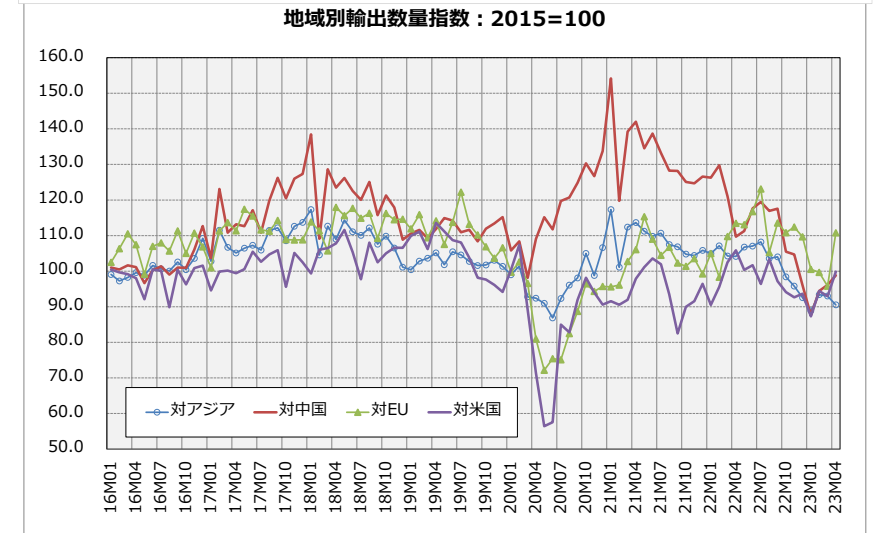
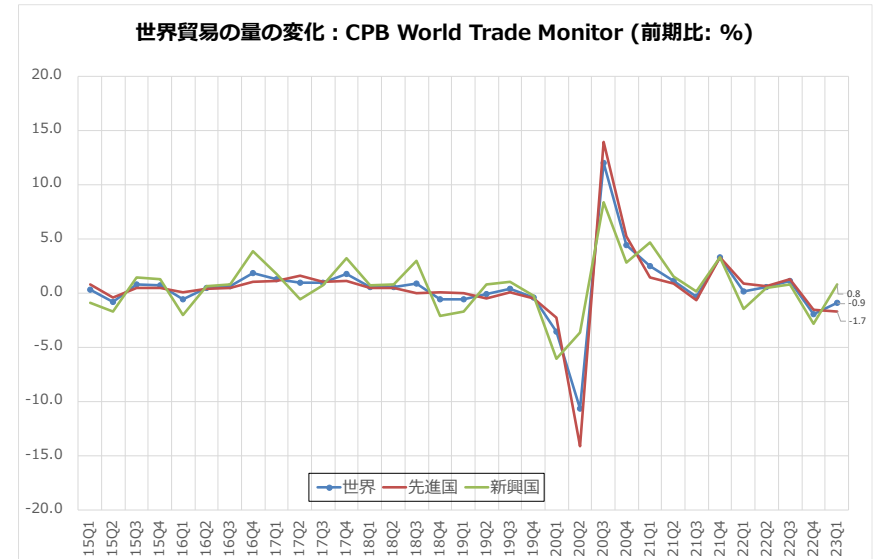
出所：経済産業省『鉱工業指数』



出所：経済産業省『第3次産業活動指数』よりAPIR作成

23年前半の世界貿易は減少局面に

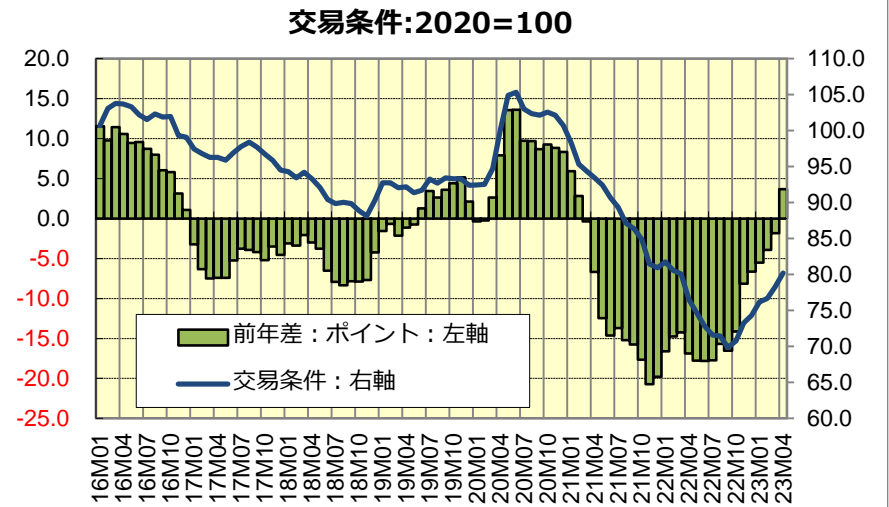
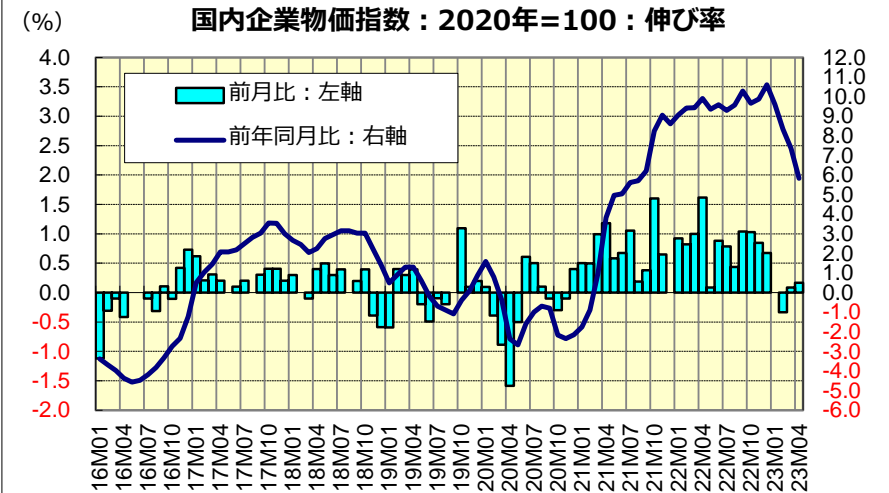
- **1-3月期世界貿易**(CPB world trade monitor)は前期比-0.9%減少(10-12月期：同-2.0%)。先進国(-1.7%)は2四半期連続のマイナス、新興国(+0.8%)2四半期ぶりのプラス。**先進国での貿易停滞の背景**には、**工業生産の回復の遅れ**がある
- **4月の貿易収支(季節調整値)**は21カ月連続の赤字、赤字幅は前月比-16.2%と6カ月連続で縮小。結果、4月の貿易赤字は1-3月平均比-27.6%縮小(1-3月期：前期比-30.0%)
- **4月の地域別貿易動向(数量ベース、季節調整値)**を1-3月平均と比較すれば、対アジアは-1.3%、対中国は+6.6%、対米は+9.1%、対EU+12.3%となった



出所：CPB World Trade Monitor. 財務省『貿易統計』からAPIR推計

国内企業物価指数、輸出入物価指数、改善する交易条件

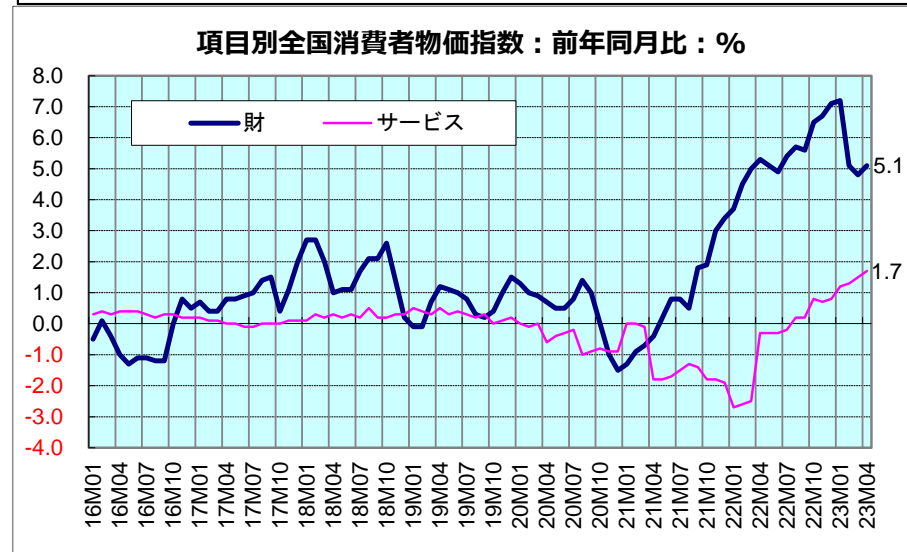
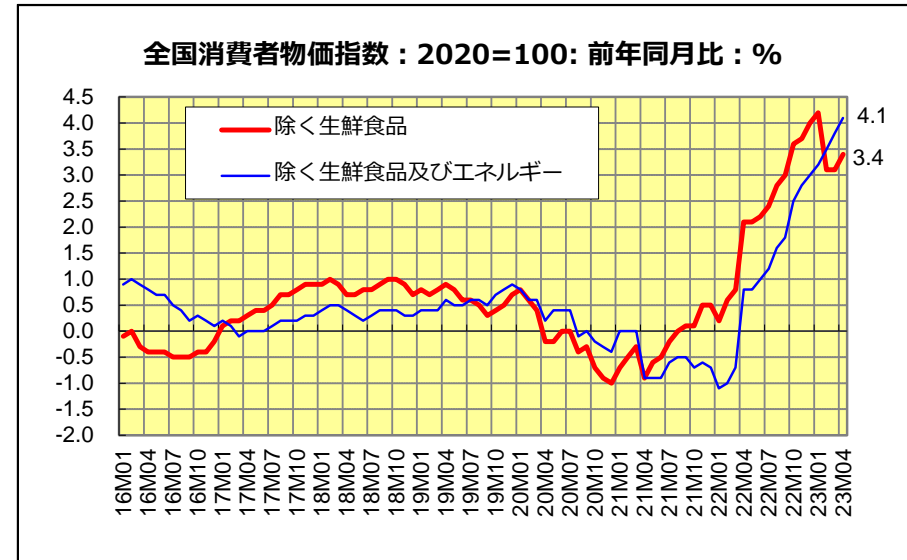
- **4月の国内企業物価指数**は前年同月比+5.8%と26カ月連続の上昇だが、4カ月連続で前月の伸びを下回った。**インフレ率はピークを打った**
- **4月の円ベース輸出物価指数**は前年同月比+1.8%と26カ月連続の上昇。一方、**円ベース輸入物価指数**は同-2.9%と26カ月ぶりの低下
- **4月の交易条件指数**(輸出物価指数/輸入物価指数*100)は、前月差+2.0ポイントと7カ月連続の上昇。前年同月差+3.7ポイント上昇し、26カ月ぶりの改善



出所：日本銀行『国内企業物価指数』

消費者物価指数：インフレ率は23年前半がピーク

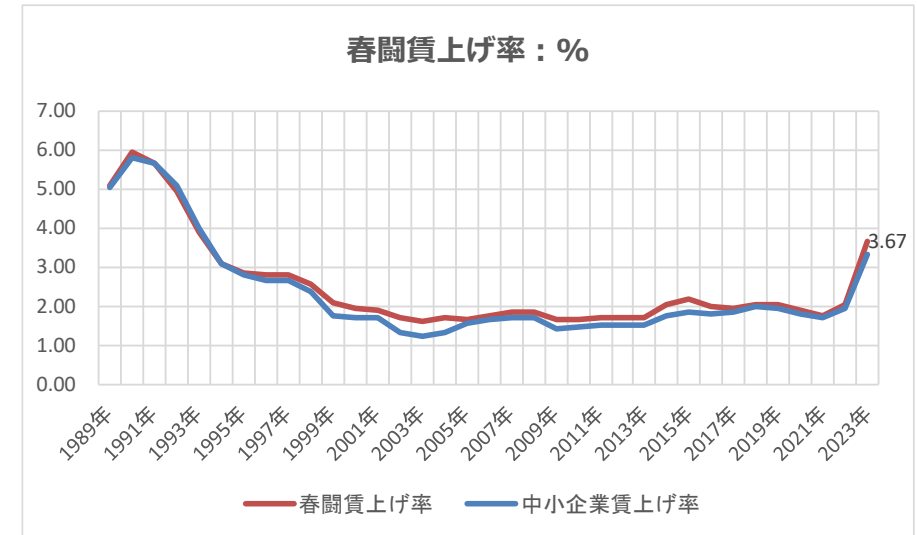
- **4月全国消費者物価総合指数**は前年同月比+3.5%と20カ月連続の上昇。**コア指数**は+3.4%と20カ月連続の上昇。**コアコア指数**は同+4.1%と13カ月連続の上昇。コアコア指数のインフレ率は3カ月連続でコア指数インフレを上回った
- 政府の電気・ガス料金抑制策により、**エネルギー**は前年同月比-4.4%と**3カ月連続の低下**。寄与度は-0.37%。**非エネルギー**は同+4.3%と**13カ月連続の上昇**。寄与度は+3.87%
- 財・サービス分類で見れば、**財**は前年同月比+5.1%と**24カ月連続の上昇**。寄与度は2.66%。**サービス**は同+1.7%と**9カ月連続の上昇**。寄与度は+0.80%。2015年3月(同+1.8%)以来の伸び



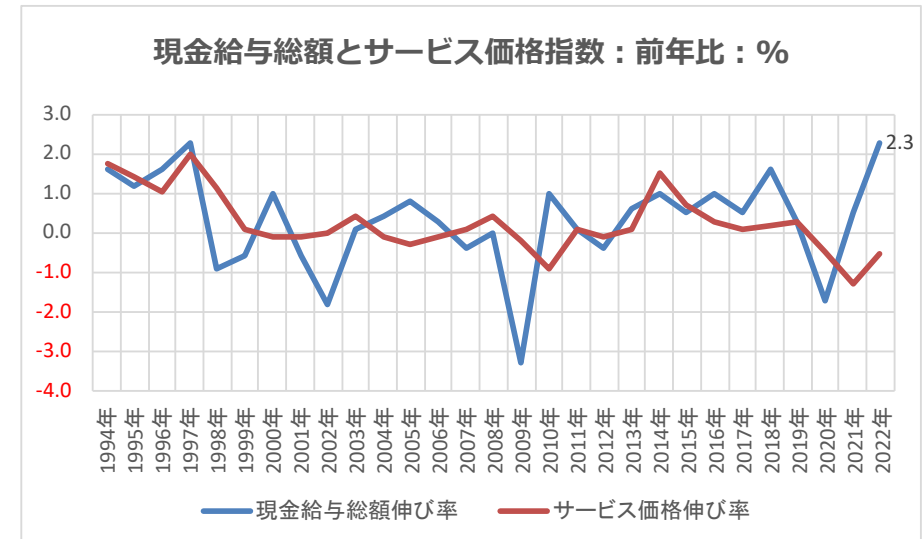
出所：総務省『全国消費者物価指数』

春闘賃上げ率とインフレ率

- 連合の調査結果(5月10日)によれば、**2023年の賃上げ率は+3.67%**(22年+2.10%)となり**1993年(+3.90%)以来の高い値**。うち、大企業は+3.35%、中小企業は+3.70%。**23年は高い賃上げ率と消費者物価インフレの一服から、実質賃金の伸びはプラス反転が期待できる**
- **賃金の動きに連動するサービス価格指数**。賃上げ効果によるサービス価格の上昇は、CPIインフレを持続可能なものとする



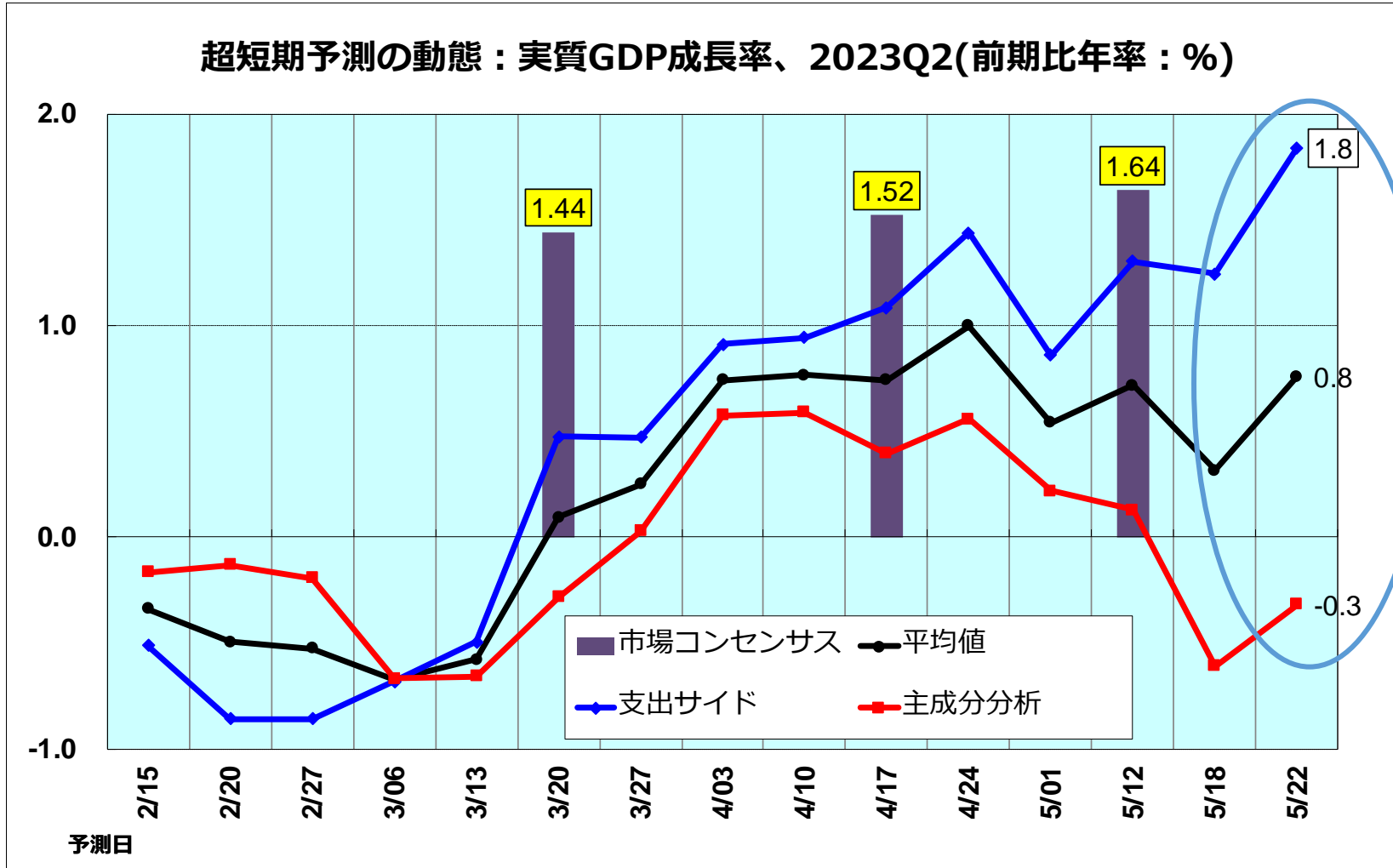
出所：連合『2023年春季生活闘争 第5回回答集計結果について』



出所：厚生労働省『毎月勤労統計調査』総務省『全国消費者物価指数』

日本経済の現況：4-6月期超短期予測の動態

超短期予測の動態：実質GDP成長率、2023Q2(前期比年率：%)



- 今回の予測では、4月の全国消費者物価指数、貿易統計(速報)、3月の建設総合統計を更新した
- 今週のCQM(支出サイド)は、**4-6月期の実質GDP成長率を前期比+0.5%、同年率+1.8%と予測**
- 国内需要は実質GDP成長率に対して前期比+0.2%ポイント、純輸出は同+0.3%ポイントの寄与度

出所：QUICK 『GDPトラッカーレポート日本経済超短期予測(CQM)』，2023年5月22日

海外環境：外生変数の想定比較

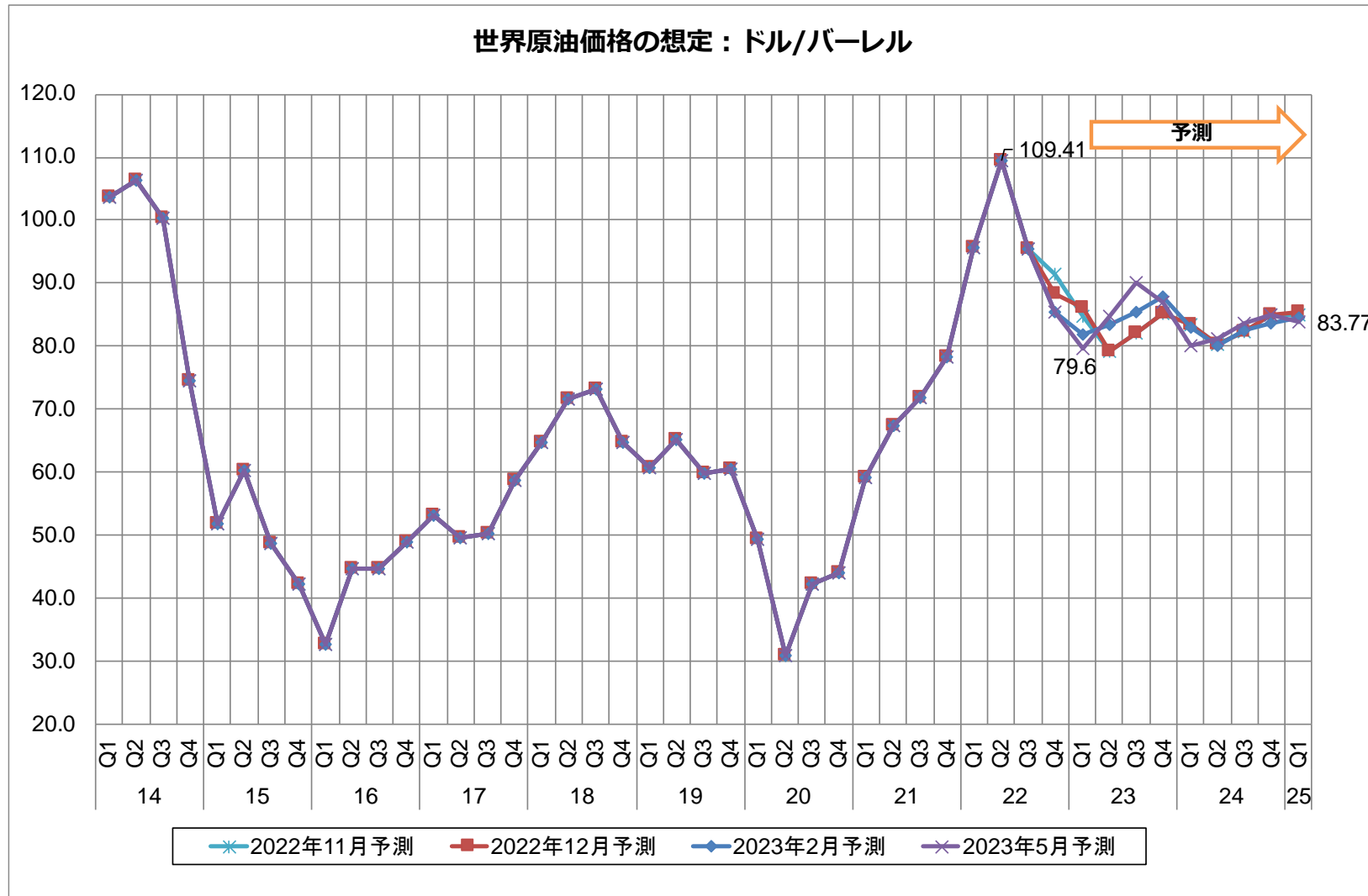
| 外生変数 | 23年度 | 24年度 |
|--------------|--------------|--------------|
| 原油価格(\$/bbl) | 85.5 | 83.5 |
| 前回 | 84.9 | 82.7 |
| 実質世界輸出(%) | 2.6 | 3.8 |
| 前回 | 2.7 | 3.8 |
| 為替レート(¥/\$) | 132.6 | 125.2 |
| 前回 | 127.4 | 121.9 |

海外外生変数の想定：

- (1)原油価格は、前回予測より23-24年度小幅上方修正、
- (2)23年度実質世界輸出を前回より幾分下方修正、
- (3)為替レートは23-24年度に5円程度の円安修正

出所：APIR『第143回 景気分析と予測』

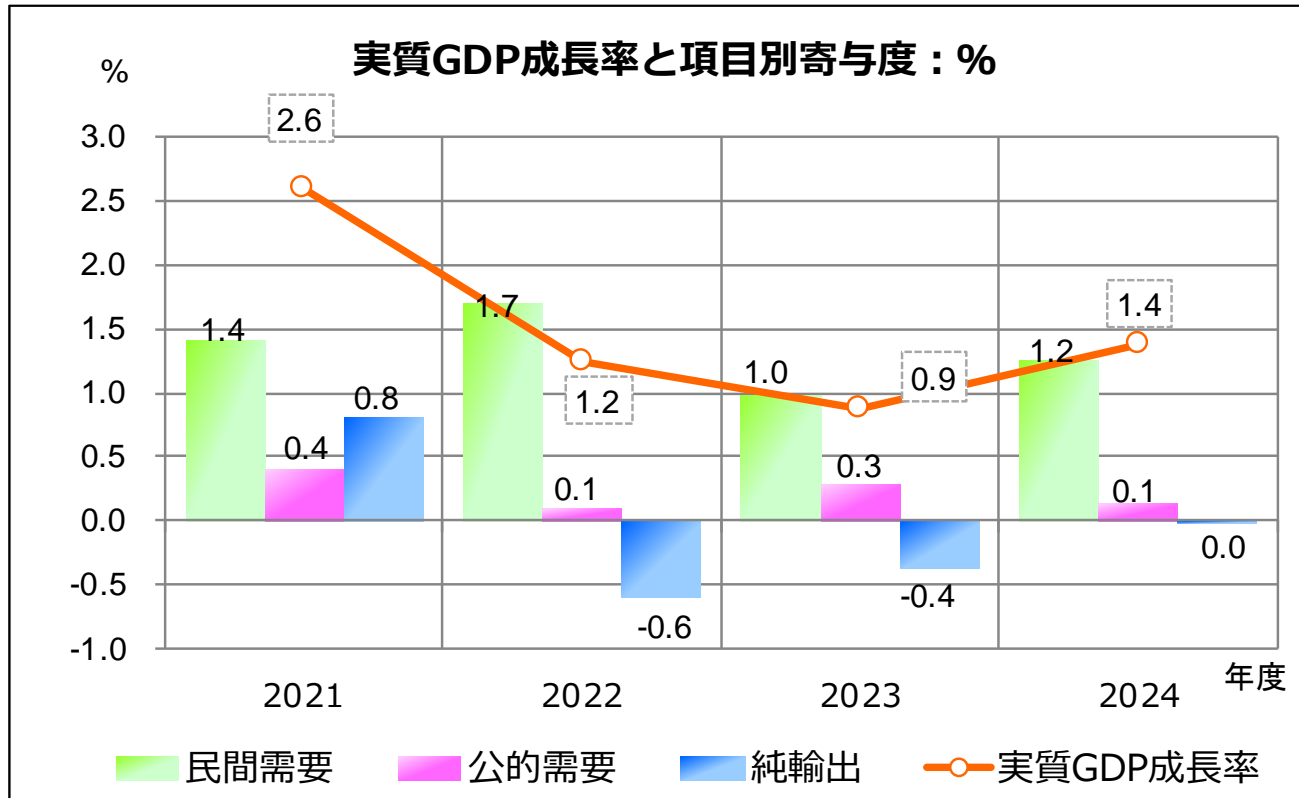
海外環境：世界原油価格の想定：原油価格高止まり



- 原油価格を四半期ベースで見れば、**23年7-9月期**に90.1ドルとピーク、以降低下に向かうが**高止まりで推移**し、24年1-3月期80.1ドル、25年1-3月期83.8ドル程度と見込む
- **23年度85.5ドル、24年度83.5ドルと想定**。前回想定から、23年度+0.6ドル、24年度+0.8ドル、円安修正した

出所：実績値は日経NEEDS

実質GDP成長率の予測結果と項目別寄与度



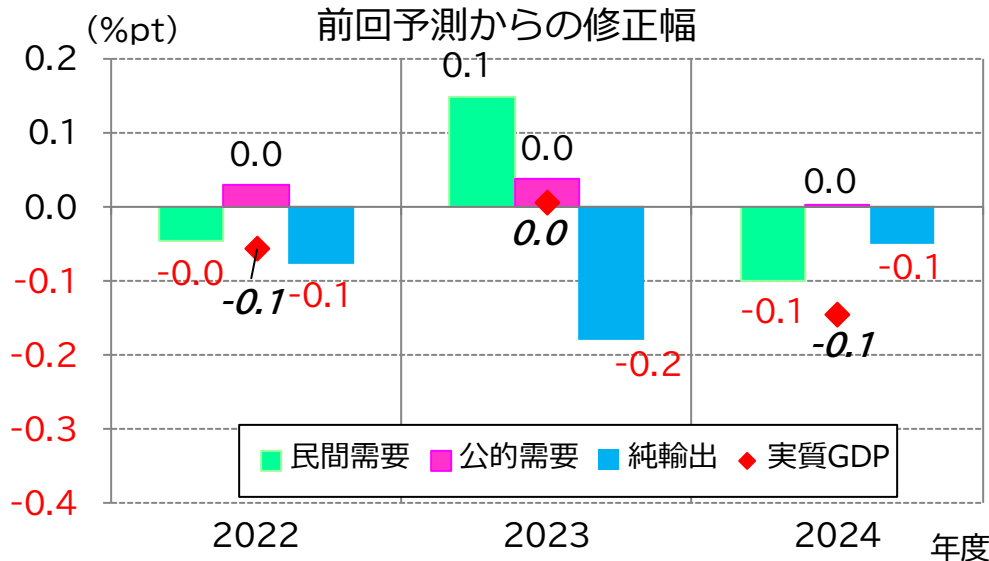
- **項目別寄与度**
- 23年度(実質GDP成長率+0.9%)は民間需要+1.0%ポイント、公的需要+0.3%ポイント、純輸出-0.4%ポイント
- 24年度(実質GDP成長率+1.4%)は民間需要+1.2%ポイント、公的需要+0.1%ポイント、純輸出-0.0%ポイント

注：四捨五入の関係で、需要構成項目の寄与度を合計しても実質GDP成長率とは必ずしも合致しない。

出所：APIR『第143回 景気分析と予測』

23年度据え置き、24年度下方修正

| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 |
|---------------|----------------|---------------|----------------|
| GDP成長率 | -0.1%pt | 0.0%pt | -0.1%pt |
| 民間需要 | -0.0%pt | +0.1%pt | -0.1%pt |
| 公的需要 | 0.0%pt | 0.0%pt | 0.0%pt |
| 純輸出 | -0.1%pt | -0.2%pt | -0.1%pt |



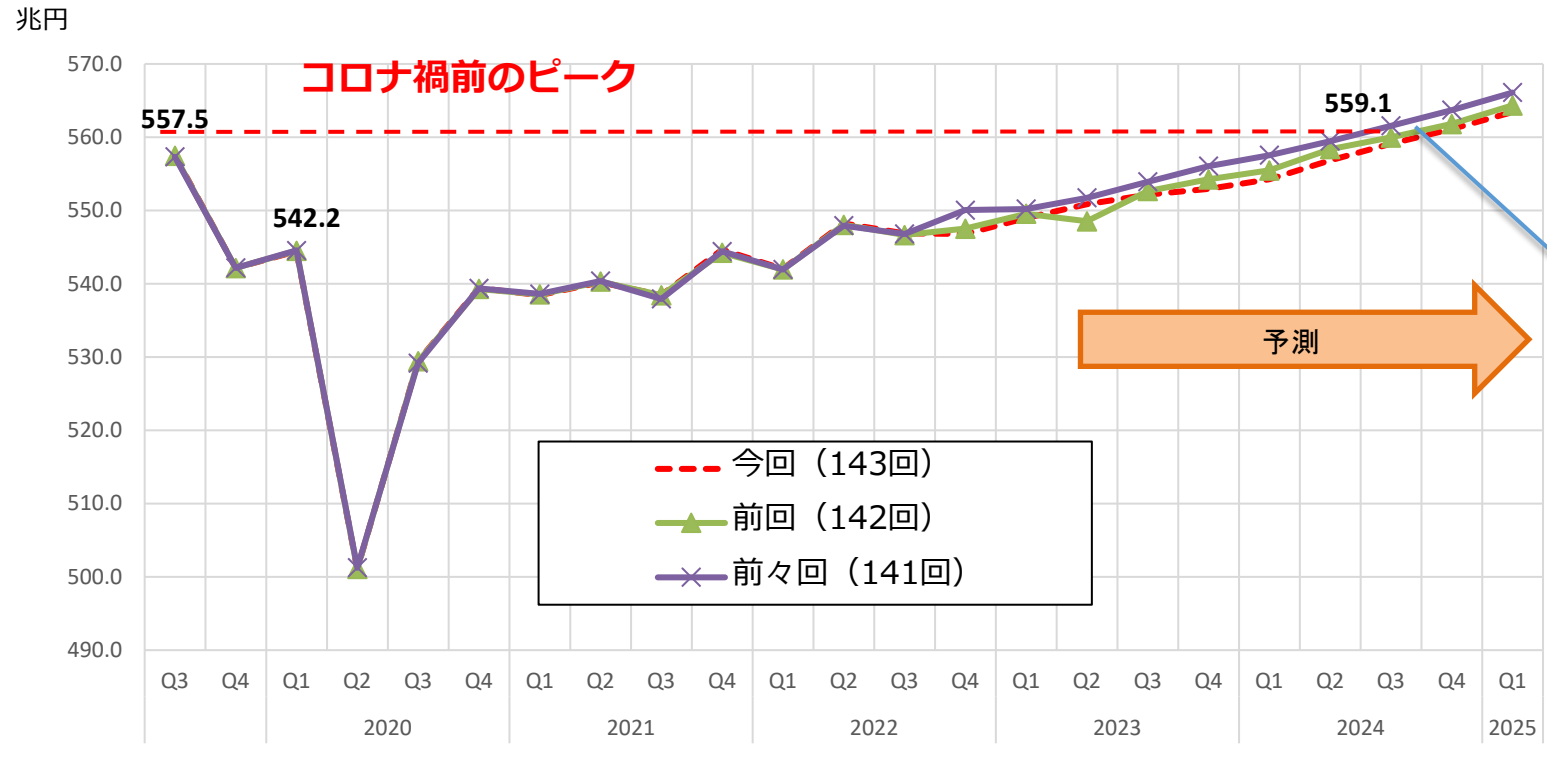
- 前回予測(2月28日公表)に比べて、
 - **22年度**：-0.1%ポイント**下方修正**
 - **23年度**：0.0%ポイント**据え置き**
 - **24年度**：-0.1%ポイント**下方修正**
- 22年度は純輸出が下方修正
- 23年度は**民間需要が上方修正**、**純輸出が下方修正**
- 24年度は**民間需要**、**純輸出がいずれも小幅下方修正**

注：四捨五入の関係で、需要構成項目の修正幅を合計してもGDPの修正幅とは必ずしも合致しない。

出所：APIR『第143回 景気分析と予測』

四半期実質GDP：実績と予測

実質GDPの推移：実績と予測（単位：兆円）

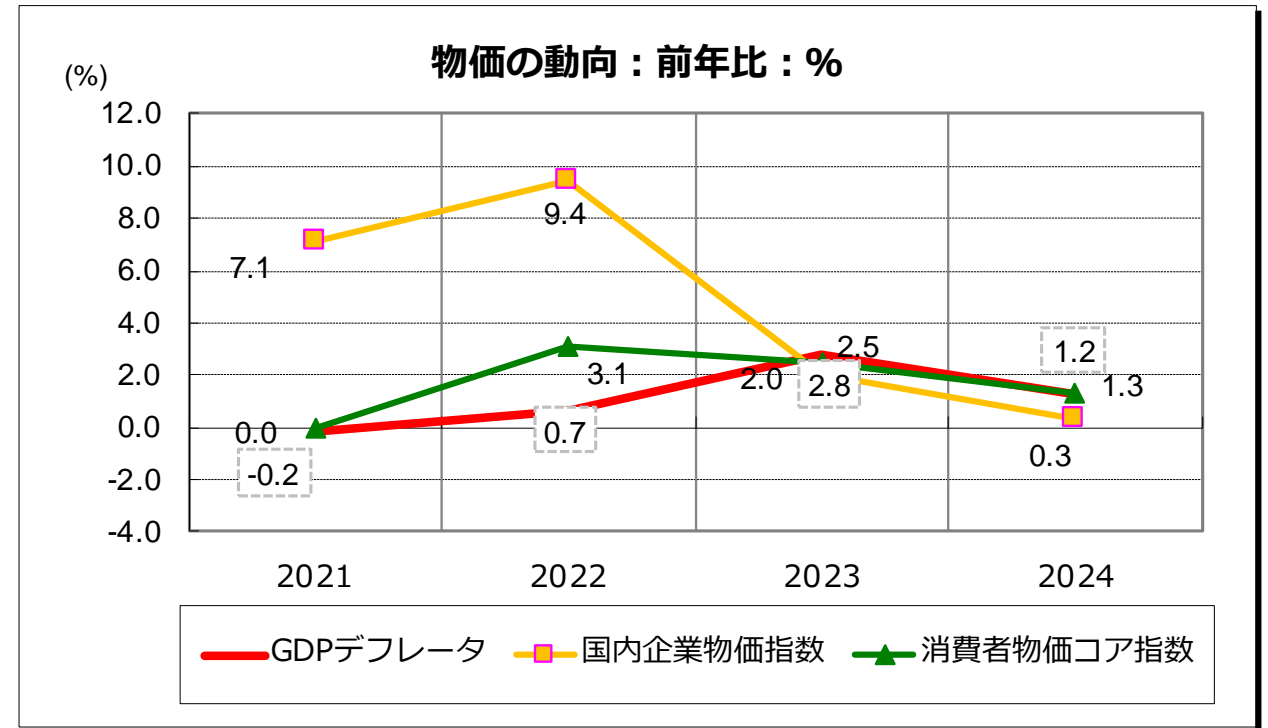


- 社会経済活動が正常化することから、23年度にサービス支出を中心に民間最終消費支出主導の回復が期待できる。一方、23年度前半の海外経済は欧米を中心に低迷することから純輸出のマイナス寄与は避けられず、同年の成長率は前年から低下する
- このため、実質GDPがコロナ禍前のピークを超えるのは24年7-9月期以降。回復に5年(20四半期)を要する。ちなみに、リーマンショックはピークからは22四半期を要している

出所：APIR『第143回 景気分析と予測』

インフレーションの動態

- **激変緩和政策の影響もありエネルギー価格は下落に転じたが、電気料金は再び値上げが予定されており、消費者物価指数基調のかく乱要因**
- **賃金の動きに連動するサービス価格の上昇もあり、インフレ率は23年度前半には3%台で推移、後半は原材料高と円安は落ち着きを見せ減速**
- **消費者物価コア指数インフレ率を、23年度+2.5%、24年度+1.3%と予測。足下の状況を反映し、23年度を+0.3%ポイント上方修正**



出所：APIR 『第143回 景気分析と予測』

日本経済予測結果表：概要

| | 今回 (2023/5/30) | | | | 前回 (2023/2/28) | | | |
|------------------|----------------|-------|-------|-------|----------------|-------|-------|-------|
| | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 |
| 実質国内総生産 (%) | 2.6 | 1.2 | 0.9 | 1.4 | 2.6 | 1.3 | 0.9 | 1.5 |
| 民間需要 (寄与度) | 1.4 | 1.7 | 1.0 | 1.2 | 1.4 | 1.7 | 0.8 | 1.3 |
| 民間最終消費支出 (%) | 1.5 | 2.4 | 1.6 | 1.5 | 1.5 | 2.5 | 1.0 | 1.3 |
| 民間住宅 (%) | ▲ 1.1 | ▲ 4.4 | 0.5 | 1.0 | ▲ 1.1 | ▲ 4.6 | ▲ 0.2 | 0.0 |
| 民間企業設備 (%) | 2.1 | 3.0 | 2.3 | 2.4 | 2.1 | 2.8 | 1.8 | 3.1 |
| 民間在庫変動 (寄与度) | 0.1 | 0.1 | ▲ 0.3 | 0.0 | 0.1 | 0.1 | 0.0 | 0.1 |
| 公的需要 (寄与度) | 0.4 | 0.1 | 0.3 | 0.1 | 0.4 | 0.1 | 0.2 | 0.1 |
| 政府最終消費支出 (%) | 3.4 | 1.1 | 0.5 | 0.5 | 3.4 | 1.3 | 0.9 | 0.4 |
| 公的固定資本形成 | ▲ 6.4 | ▲ 2.6 | 3.0 | 0.7 | ▲ 6.4 | ▲ 3.7 | 1.0 | 0.9 |
| 公的在庫変動 (寄与度) | 0.0 | ▲ 0.0 | ▲ 0.0 | 0.0 | 0.0 | ▲ 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 外需 (寄与度) | 0.8 | ▲ 0.6 | ▲ 0.4 | ▲ 0.0 | 0.8 | ▲ 0.5 | ▲ 0.2 | 0.0 |
| 財貨サービスの輸出 (%) | 12.4 | 4.4 | ▲ 1.2 | 2.1 | 12.3 | 4.6 | ▲ 0.4 | 3.1 |
| 財貨サービスの輸入 (%) | 7.1 | 7.1 | 0.8 | 2.1 | 7.0 | 7.4 | 0.6 | 2.8 |
| 名目国内総生産 (%) | 2.4 | 1.9 | 3.7 | 2.6 | 2.4 | 2.2 | 3.6 | 2.6 |
| 国内総生産デフレーター (%) | ▲ 0.2 | 0.7 | 2.8 | 1.2 | ▲ 0.1 | 0.9 | 2.7 | 1.1 |
| 国内企業物価指数 (%) | 7.1 | 9.4 | 2.0 | 0.3 | 7.1 | 9.6 | 1.9 | 0.4 |
| 消費者物価コア指数 (%) | 0.0 | 3.1 | 2.5 | 1.3 | 0.0 | 3.1 | 2.2 | 1.3 |
| 鉱工業生産指数 (%) | 5.8 | ▲ 0.2 | ▲ 0.1 | 2.2 | 5.8 | 0.3 | 1.3 | 2.0 |
| 住宅着工戸数：新設住宅 (%) | 6.6 | ▲ 0.6 | 0.1 | 0.8 | 6.6 | ▲ 1.1 | ▲ 0.3 | ▲ 0.1 |
| 完全失業率 (%) | 2.8 | 2.6 | 2.6 | 2.4 | 2.8 | 2.5 | 2.4 | 2.3 |
| 経常収支 (兆円) | 20.2 | 9.2 | 9.4 | 11.7 | 20.3 | 11.7 | 16.1 | 16.0 |
| 対名目GDP比 (%) | 3.7 | 1.6 | 1.6 | 2.0 | 3.7 | 2.1 | 2.8 | 2.7 |
| 原油価格 (ドル/バレル) | 78.3 | 92.5 | 85.5 | 83.5 | 78.3 | 93.1 | 84.9 | 82.7 |
| 為替レート (円/ドル) | 112.4 | 135.4 | 132.6 | 125.2 | 112.4 | 134.7 | 127.4 | 121.9 |
| 米国実質国内総生産 (%、暦年) | 5.9 | 2.1 | 1.1 | 1.0 | 5.9 | 2.1 | 0.6 | 1.7 |

出所：APIR 『第143回 景気分析と予測』

関西経済の現況と予測

Kansai Economic Insight
Quarterly
No.64

マクロ経済分析プロジェクト Contributors

稲田義久・入江啓彰・小川亮

郭秋薇・盧昭穎・野村亮輔・吉田茂一



【QRコードより
本予測説明動画が5/30から
視聴可能予定】

予測の要旨

消費の復元を起点として好循環に向かう関西経済 景気は足下改善、先行きも改善を見込む

- **【概況】 23年1-3月期の関西経済**は、コロナ禍に伴う行動制限の解除、また賃上げの動きの広がりにより、**家計部門を中心に緩やかに持ち直した**。一方、**企業部門や海外部門**では、原材料価格の高騰、海外経済の減速などの不安要因から、**弱い動き**が見られる。先行きは、消費の復元を起点として民間部門全体に好影響が波及し、投資増や賃上げの継続につながるかがポイント
- **【家計部門】 家計をめぐる環境**は、本格的な経済活動の再開、物価高に起因する賃上げ、マインドの回復と**総じて改善**している。このため家計部門は前期に引き続き、概ね持ち直している。センチメント、大型小売店販売、所得・雇用環境、住宅市場などいずれも堅調に推移している。依然として物価高の影響も見られるものの、政策効果もあり幾分緩和している

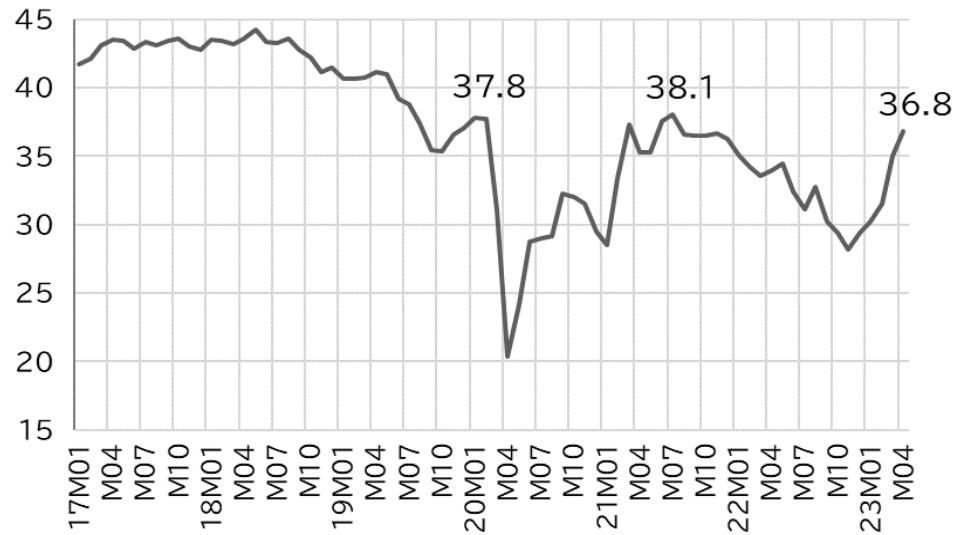
予測の要旨

(続き)

- **【企業部門】業種間で明暗が分かれています。製造業**は原材料価格の高騰や海外経済の減速などから生産・景況感ともに**軟調**である。一方**非製造業**は経済活動再開に伴い、宿泊・飲食・小売など対面型サービスを中心に**復調**している。また**23年度の設備投資計画**は、増勢となった前年度の水準を維持し、業種問わず**底堅い**
- **【対外部門】財の貿易**については輸出・輸入ともに前年比増となったが、**増加幅は前期から縮小**。輸出を**地域別**に見ると、欧米向けは伸びが鈍化、中国向けは前年を下回った。一方**インバウンド需要**は順調で、関空経由の外国人入国者数や免税売上高はコロナ禍前のピークの5割を超えるまでに回復
- **【公的部門】**前期から引き続き、**全国に比べて堅調に推移**している

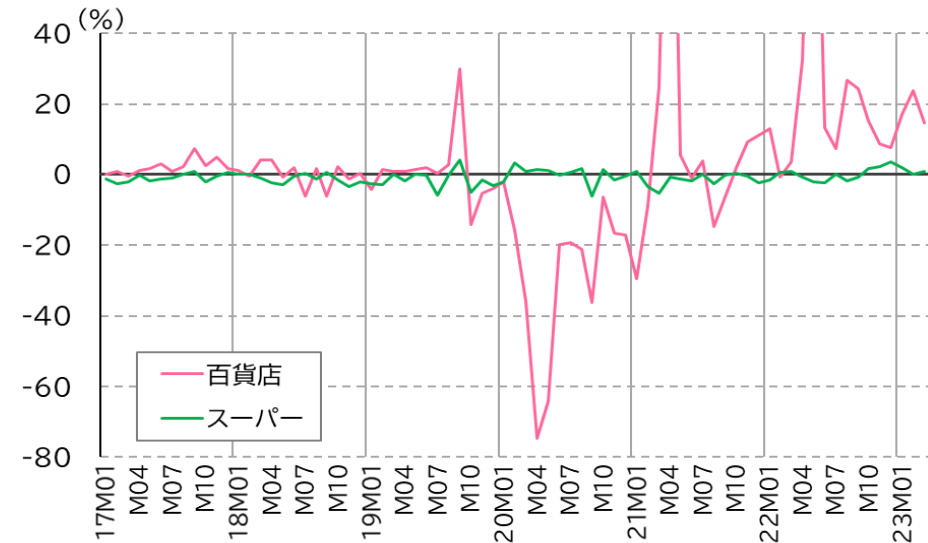
消費者センチメント・大型小売店販売

- 23年1-3月期の**消費者態度指数**は32.3で、前期から+3.3ポイントで**6四半期ぶりに改善**。月次ベースでは足下4月に36.8となり、**5カ月連続の改善**。センチメント改善の背景には、行動制限緩和といった経済活動正常化、春闘による賃上げの進展、物価上昇懸念の緩和などがある
- 1-3月期の**大型小売店販売額**は9,233億円となった。前年同期比は+7.1%となり、**6四半期連続で前年を上回った**。前期から引き続き、百貨店(同+18.1%)は客足の回復、スーパー(同+1.1%)は飲食料品の値上がりにより販売額が増加



消費者態度指数(センチメント)

出所：内閣府『消費動向調査』、季節調整はAPIRによる。

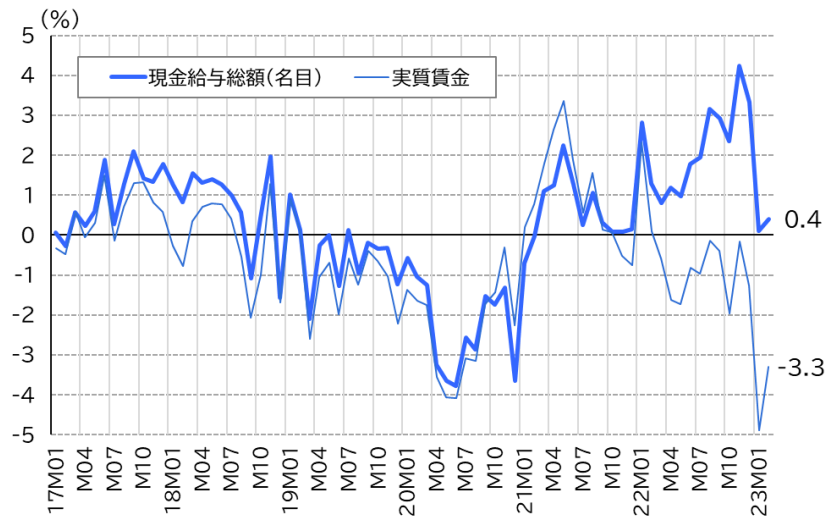


大型小売店等販売状況(前年同月比)

出所：近畿経済産業局『百貨店・スーパー販売状況』

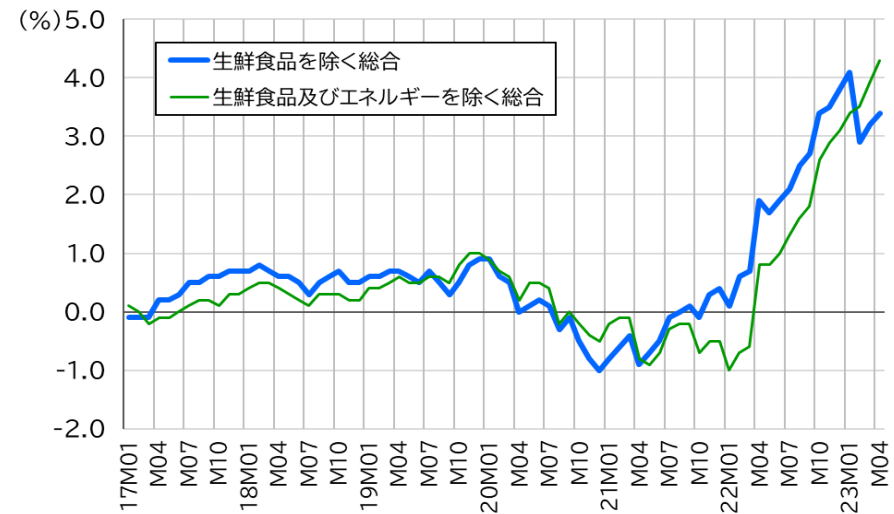
所得・物価

- 関西の現金給与総額(23年2月)は、前年同月比+0.4%。24カ月連続の改善で、プラス幅は大きく縮小。また物価変動の影響を除いた実質賃金は、同-3.3%と12カ月連続のマイナスとなった
- 23年1-3月期の消費者物価指数(コア、2020年平均=100)は103.8で、前年同期比+3.4%と6四半期連続で上昇。内訳をみると、生鮮食品を除く食料が全体を大きく引き上げている。一方エネルギーは、食料品とともに物価上昇に寄与していたが、政府の緩和策の効果によりマイナスに転じた



現金給与総額と実質賃金

注：関西の値はAPIRによる推計。常用労働者数(2011年平均)の加重平均として算出。
出所：厚生労働省『毎月勤労統計調査』よりAPIR作成

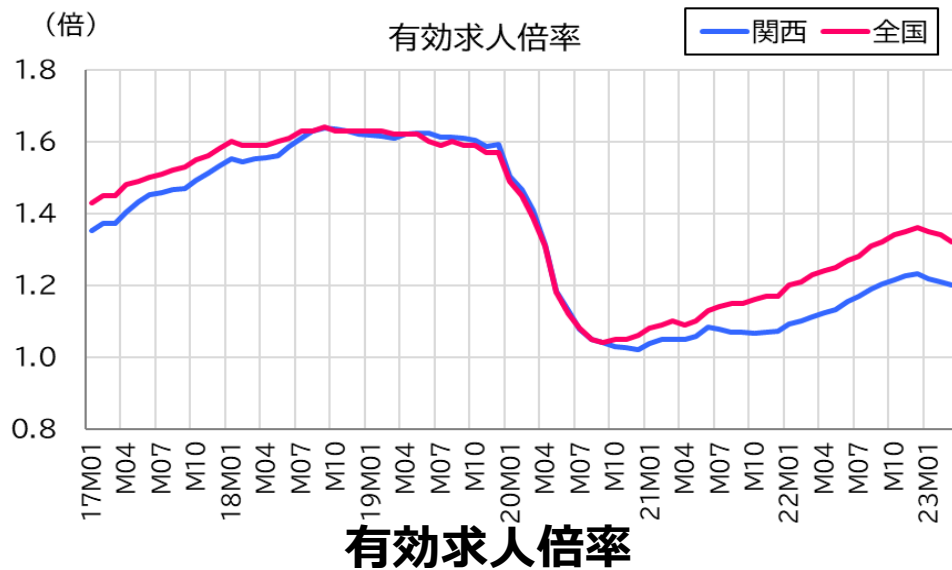


関西消費者物価指数(前年同月比)

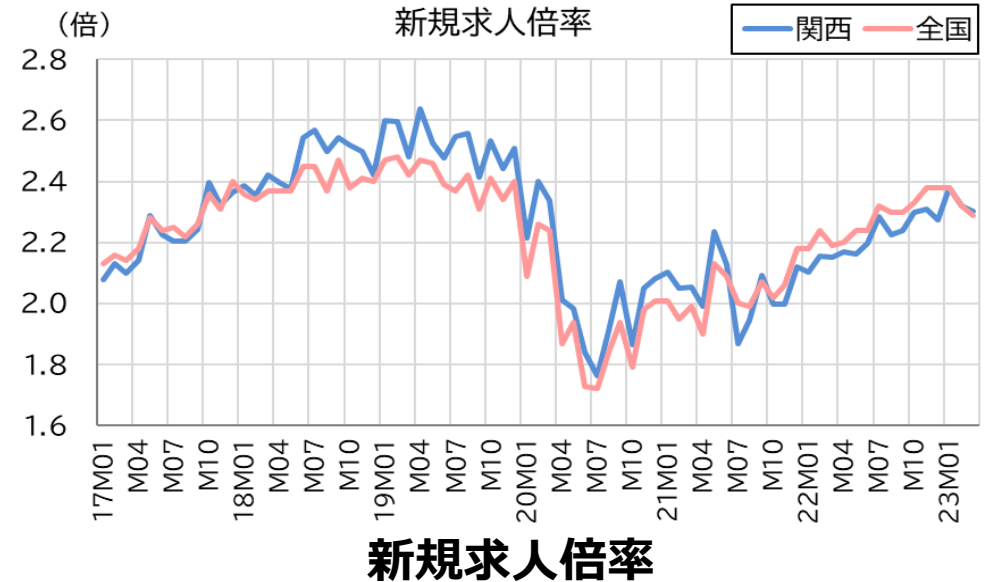
出所：総務省統計局「消費者物価指数」

雇用

- 23年1-3月期の有効求人倍率(季節調整値)は1.21倍で、前期比-0.01ポイント悪化。小幅だが、悪化は6四半期ぶり。月次ベースでは足下3月まで3カ月連続の悪化となっている。また1-3月期の新規求人倍率(季節調整値)は2.33倍で、前期比+0.04ポイントの上昇
- 宿泊・飲食や小売などで求人が伸びている一方、原材料コスト増に直面している製造業や建設業では求人を抑える動きが見られる
- 全国の1-3月期の有効求人倍率は1.34倍、新規求人倍率は2.33倍だった。有効求人倍率については依然として関西と全国で開きがある



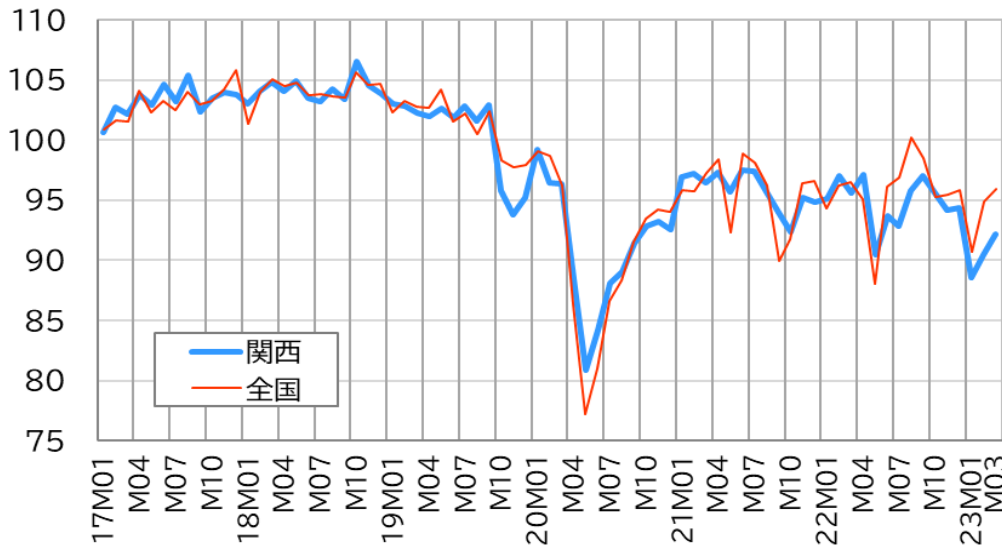
出所：厚生労働省『一般職業紹介状況』



出所：厚生労働省『一般職業紹介状況』

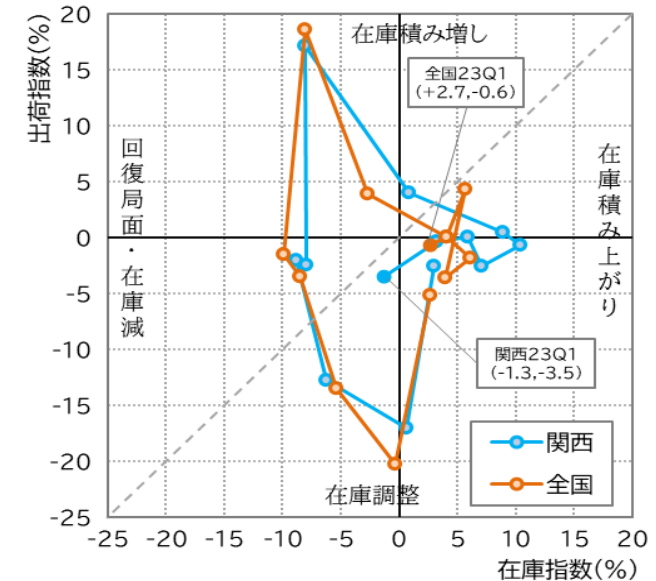
生産・在庫

- 23年1-3月期の生産指数(季調値、2015年=100)は90.4で、前期比-4.5%と**2四半期連続の減産**。部材供給不足や天候不順のあった1月の減産が響いた。業種別では、生産用機械工業や電子部品・デバイス工業などで大きな落ち込み
- 1-3月期の関西の在庫指数は前年同期比-1.3%、出荷指数は同-3.5%となった。在庫指数は7四半期ぶりの低下、出荷指数は2四半期連続の低下。**在庫循環図上では、第4象限から第3象限にシフトした**



鋁工業生産指数(2015年=100)

出所：近畿経済産業局「鋁工業生産動向」、経済産業省「鋁工業生産動向」

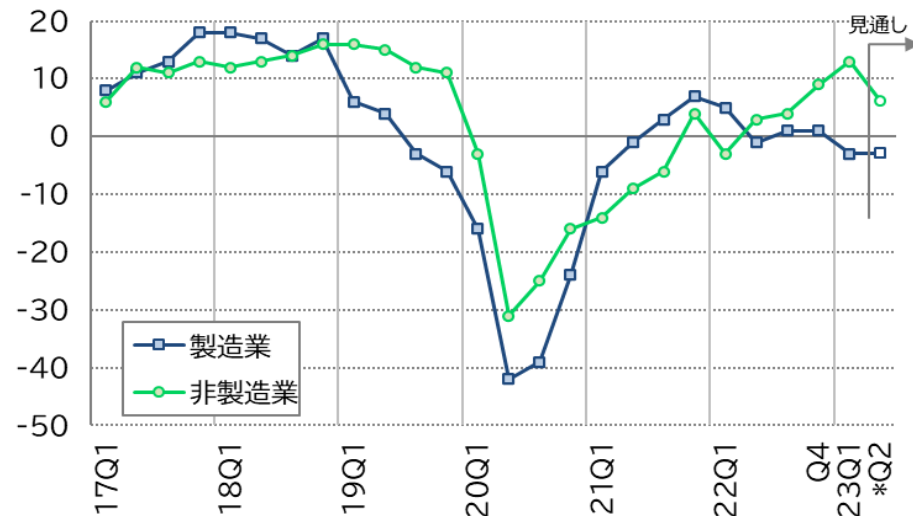


在庫循環図

注：白抜きになっているポイントが最新時点(2019年1-3月期から23年1-3月期)

短観：業況判断DIと設備投資計画

- 23年3月短観での関西企業の業況判断DI(全規模・全産業)は+5。6四半期連続でプラス圏を維持したが、前期比横ばい。業種別では、製造業は-3(前期比-4ポイント)に対して非製造業は+13(同+4ポイント)と明暗が分かれる結果となった
- 関西企業の2023年度設備投資計画(全規模・全産業ベース)は前年度比+0.4%となった。22年度(同+13.4%)に比して小幅となっているが、大きく伸びた前年度に続いて底堅い。業種別では製造業同+0.5%、非製造業同+0.4%と、大きな違いは見られない



短観：企業業況判断DIの推移

注：全規模・全産業ベース。*は見通しであることを示す。
出所：日本銀行大阪支店『企業短期経済観測調査(近畿地区)』

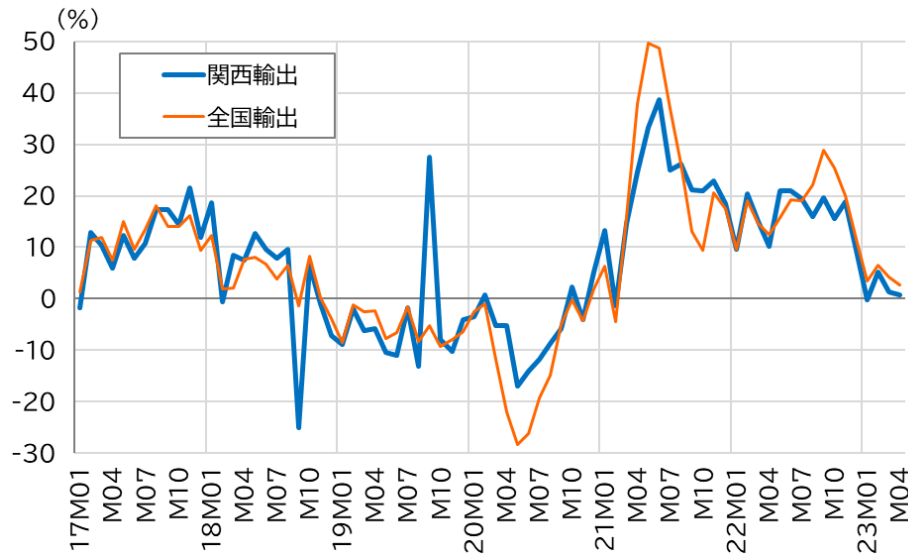
| | 関西 | | | 全国 | | |
|------|------|------|------|------|------|------|
| | 全産業 | 製造業 | 非製造業 | 全産業 | 製造業 | 非製造業 |
| 22年度 | 13.4 | 19.7 | 9.3 | 11.4 | 15.7 | 8.9 |
| 23年度 | 0.4 | 0.5 | 0.4 | 3.9 | 6.3 | 2.4 |

短観：設備投資計画：前年度比(%)

注：全規模・全産業ベース。
出所：日本銀行大阪支店『企業短期経済観測調査(近畿地区)』

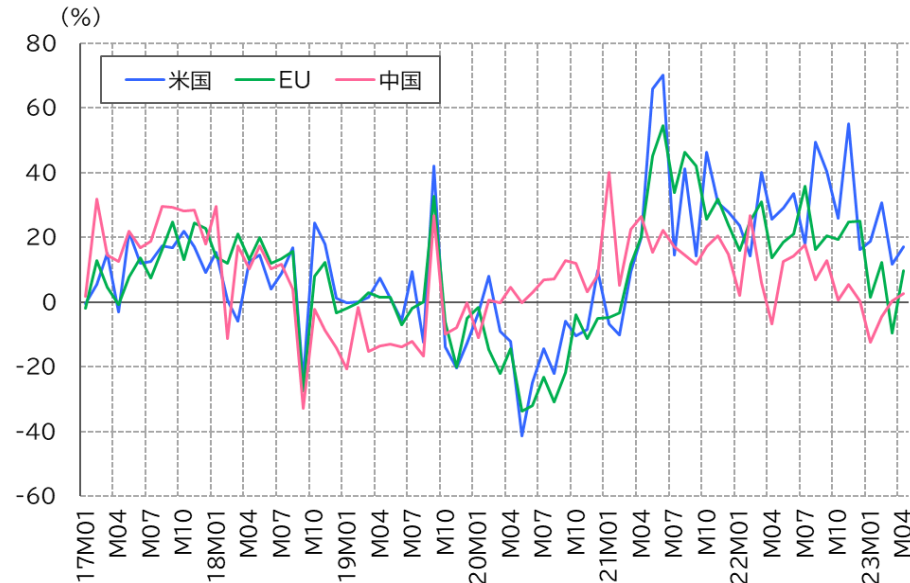
対外部門(財貿易)

- 23年1-3月期の輸出額は5.0兆円で、前年同期比+2.1%と**10四半期連続のプラス**。ただし前期(同+14.5%)に比べて**プラス幅は大きく縮小**し、全国の伸び(同+4.8%)に比べても小幅となった。貿易収支は+2,354億円で**2四半期連続の黒字**だった
- 輸出を地域別にみると、米国向けおよびEU向けはそれぞれ前年同期比+21.4%、同+0.6%とプラスを維持したが、前期からプラス幅は縮小した。また**中国向けは、同-4.9%と12四半期ぶりのマイナス**



関西と全国の輸出(前年同月比)

出所：大阪税関『近畿圏貿易概況』

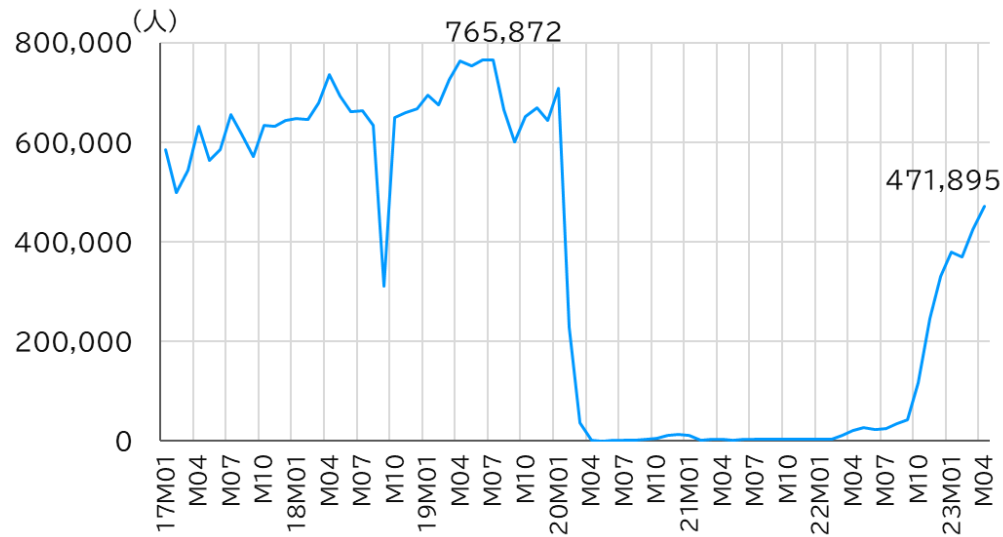


地域別輸出(前年同月比)

出所：大阪税関『近畿圏貿易概況』

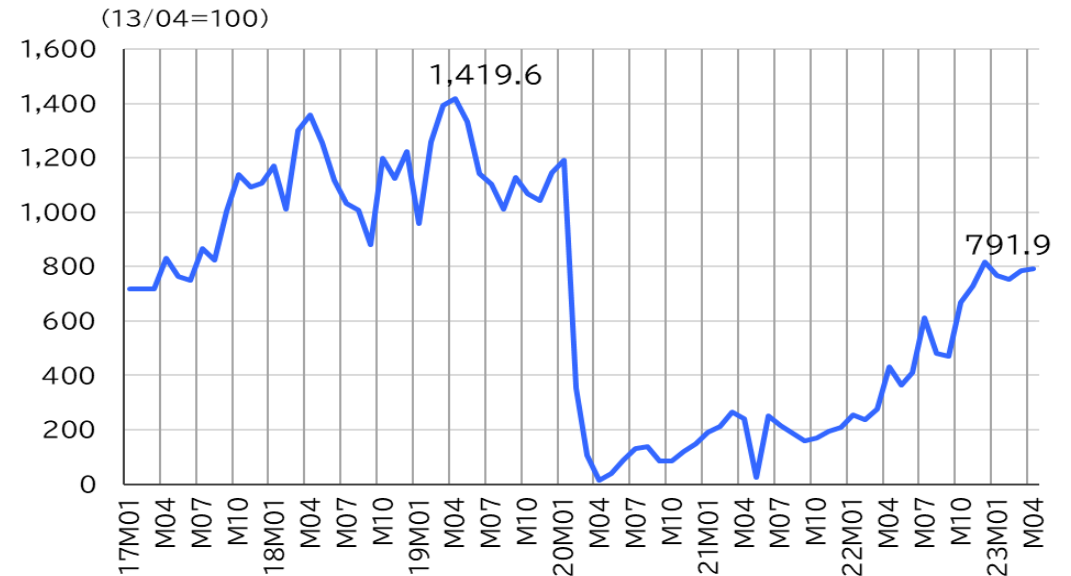
対外部門(サービス貿易：訪日外国人客数、百貨店免税売上)

- 23年1-3月期に関空経由で入国した**外国人客数**は117.4万人だった。2020年以降では初めて**四半期で100万人を超えた**。足下4月単月では47万人となり、**コロナ禍前の19年4月(76万人)の6割超まで戻っている**
- **百貨店免税売上高**は前年同期比+201.4%となり、8四半期連続で前年を上回った。韓国、香港、台湾などからの**訪日客の回復で堅調に推移している**



関空経由訪日外国人客数

出所：法務省『出入国管理統計』

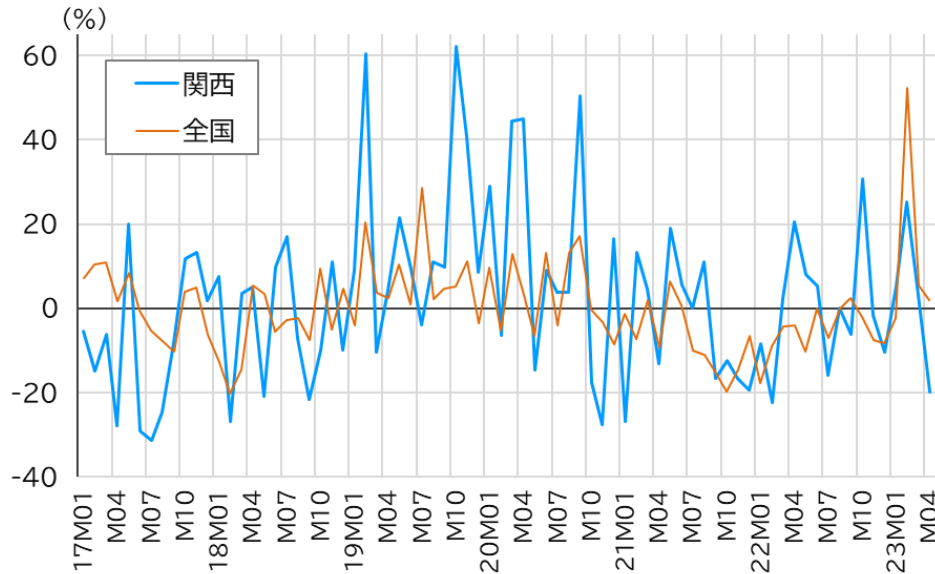


百貨店免税売上

出所：日本銀行大阪支店『百貨店免税売上(関西地区)』

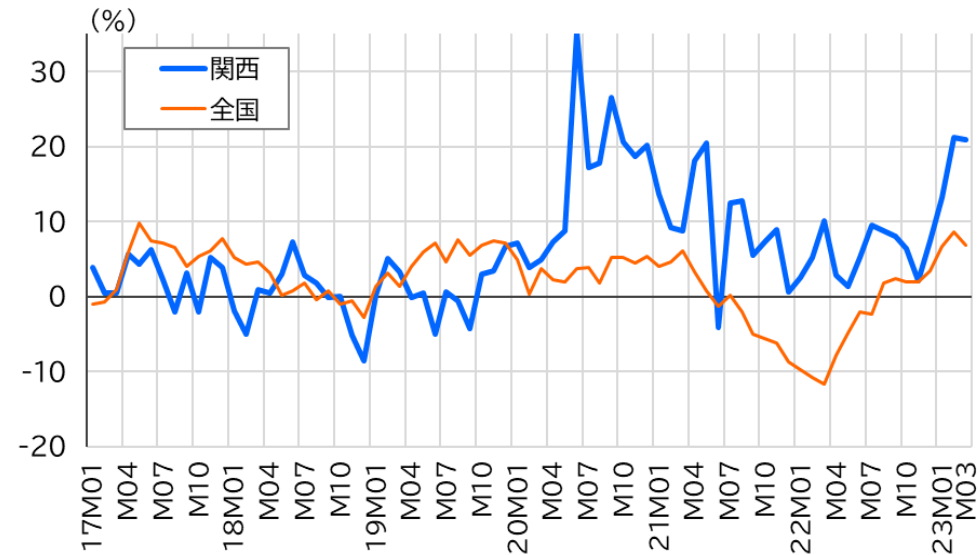
公共工事

- 23年1-3月期の公共工事請負金額は前年同期比+8.5%と2四半期連続のプラス。全国は同+14.7%で10四半期ぶりの前年比増だった。関西・全国とも堅調に推移している
- 関西の公共工事出来高は前年同期比+18.4%で、14四半期連続のプラス。全国も同+7.3%と2四半期連続のプラス。関西・全国とも前年比増が続いており、公共工事請負金額と同様に堅調な動きとなっている



公共工事請負金額(前年同月比)

出所：東日本建設業保証株式会社『公共工事前払金保証統計』

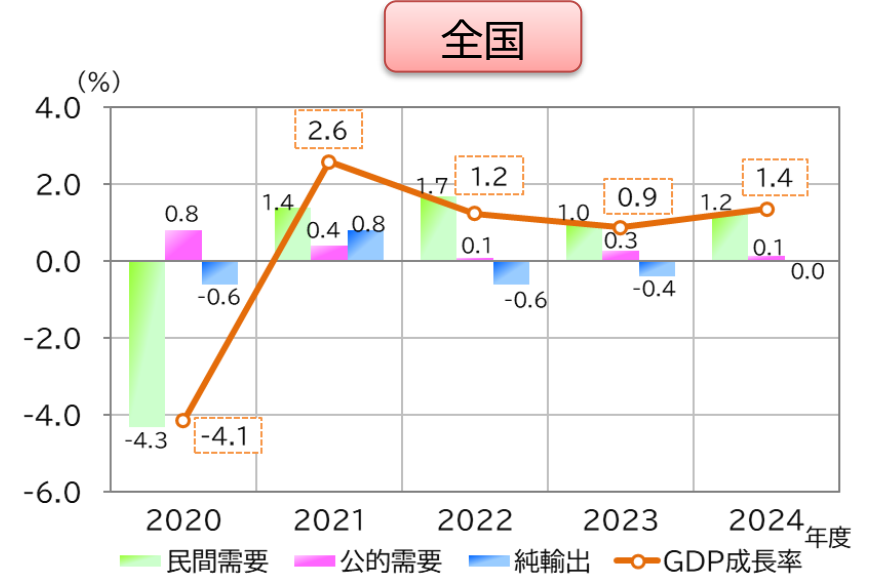
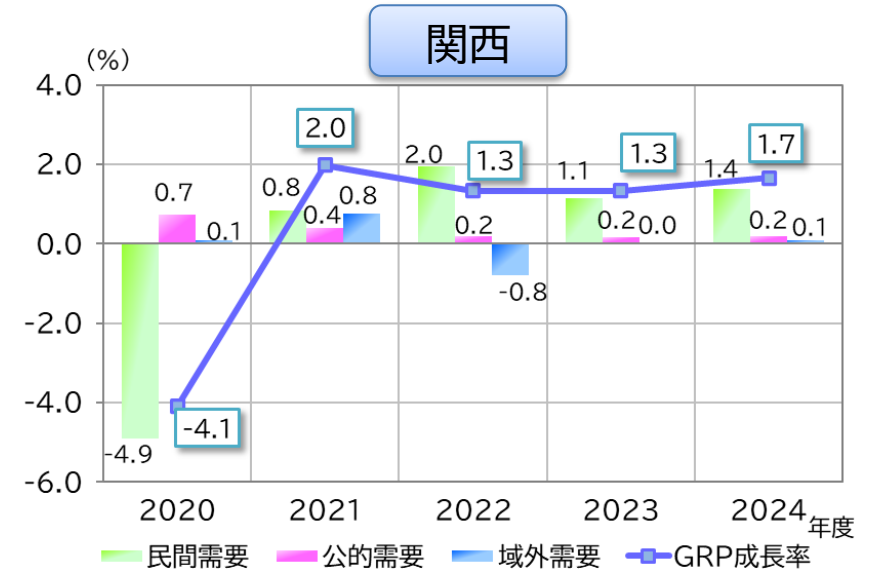


公共工事出来高(前年同月比)

出所：国土交通省「建設総合統計」

実質GRP成長率の予測結果と項目別寄与度

- 関西の実質GRP成長率を**2023年度+1.3%、24年度+1.7%**と予測。19年度・20年度の2年連続のマイナス成長から、21年度以降は1～2%のプラス成長が続く。**23年度にはコロナ禍前(19年度)のGRP水準をほぼ回復する**
- 成長に対する寄与度を見ると、**民間需要**は23年度+1.1%ポイント、24年度+1.4%ポイントと**成長の牽引役**となる。また**公的需要**も23年度・24年度ともに+0.2%ポイントと**成長を下支える**。**域外需要**は、アジア向け輸出が弱い動きにとどまることなどから、**成長に対する寄与はほとんどない**

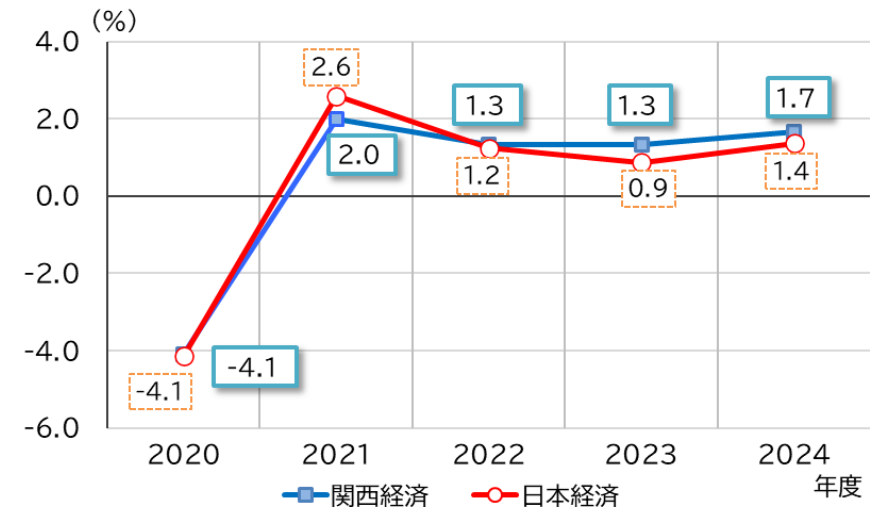


前回予測からの修正・日本経済予測との比較

- 前回予測(23年2月28日公表)に比べて、
 - ・ **23年度**：修正なし
 - ・ **24年度**：+0.1%ポイント **上方修正**
- **23年度**は、個人消費の回復など経済活動の正常化により**民間需要を上方修正**。一方中国向け輸出の減速を反映したことにより**域外需要が下方修正**となった。**24年度**も、経済活動が引き続き安定的に推移すると見込み、**民間需要を小幅上方修正**とした
- **日本経済予測と比較**すると、**23年度**では欧米経済の停滞で日本経済は輸出の失速を見込むが、**関西経済はウエイトの高いアジア向けの持ち直し**により、**小幅増を見込む**。**24年度**も**民間部門・公的部門とも設備投資が堅調に推移し**、**日本経済を上回る成長**となる

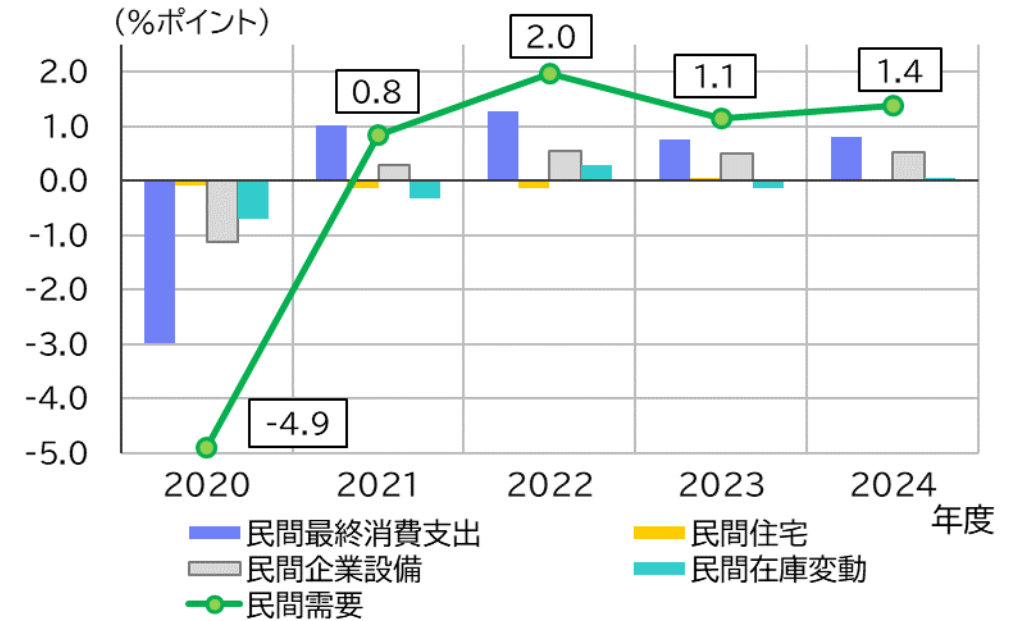
注：四捨五入の関係で、需要構成項目の寄与度を合計しても実質GDP成長率とは必ずしも合致しない。
出所：APIR KEIQ No.64

| | 2023年度 | 2024年度 |
|---------------|-------------|----------------|
| GRP成長率 | 修正なし | +0.1%pt |
| 民間需要 | +0.2%pt | +0.1%pt |
| 公的需要 | 修正なし | 修正なし |
| 域外需要 | -0.1%pt | 修正なし |



民間部門の寄与

- **民間需要のGRP成長率に対する寄与度**は、23年度+1.1%ポイント、24年度+1.4%ポイントとなる
- **家計部門の実質GRP成長率に対する寄与度**は23年度+0.8%ポイント、24年度+0.8%ポイントで、サービス消費の回復から、両年度ともにGRP成長率全体の半分以上が家計部門の寄与となる
- **企業部門の実質GRP成長率に対する寄与度**は23年度同+0.3%ポイント、24年度同+0.6%ポイントで、企業設備投資が成長を幾分下支える



関西経済における民間部門の寄与

注：四捨五入の関係で、各構成項目の寄与度を合計しても民間需要の寄与度とは必ずしも合致しない。

出所：APIR KEIQ No.64

関西経済予測結果表(2023年5月30日予測結果)

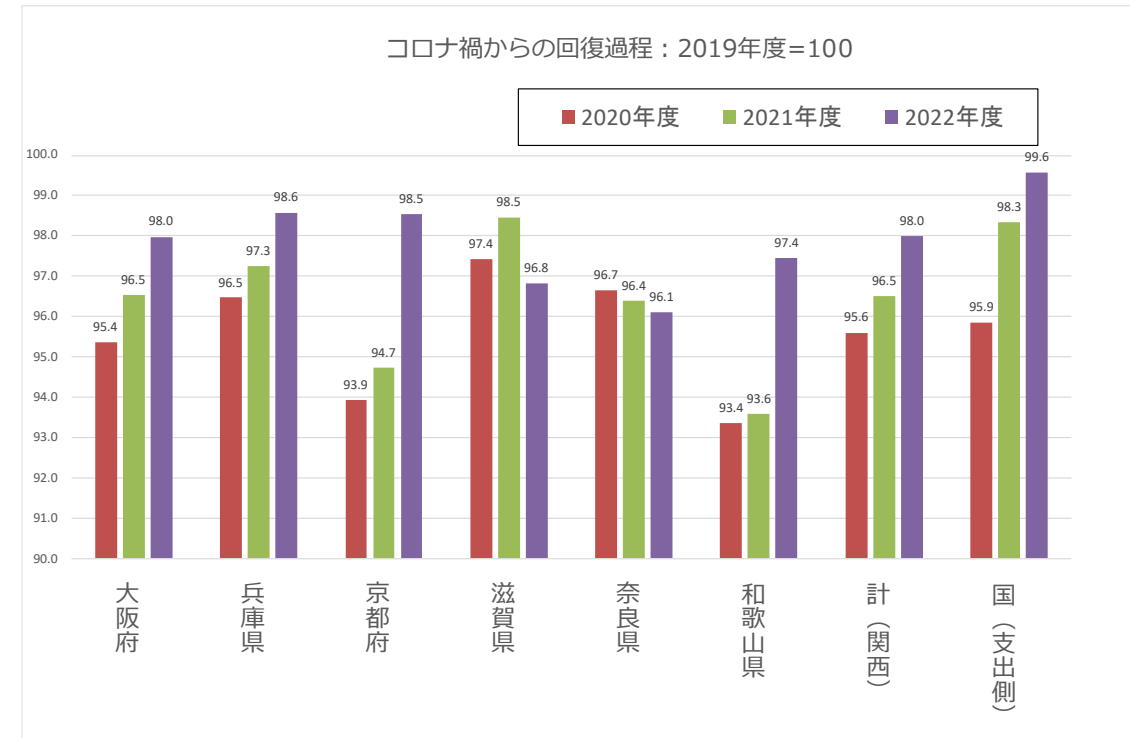
| 年度 | 関西経済 | | | | | 日本経済 | | | | |
|-----------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 |
| 民間最終消費支出 | ▲ 5.4 | 1.9 | 2.3 | 1.4 | 1.5 | ▲ 5.1 | 1.5 | 2.4 | 1.6 | 1.5 |
| 民間住宅 | ▲ 3.0 | ▲ 4.2 | ▲ 4.2 | 1.5 | 0.7 | ▲ 7.6 | ▲ 1.1 | ▲ 4.4 | 0.5 | 1.0 |
| 民間企業設備 | ▲ 6.8 | 1.7 | 3.4 | 3.0 | 3.1 | ▲ 5.7 | 2.1 | 3.0 | 2.3 | 2.4 |
| 政府最終消費支出 | 2.8 | 3.0 | 1.1 | 0.9 | 0.9 | 2.7 | 3.4 | 1.1 | 0.5 | 0.5 |
| 公的固定資本形成 | 8.3 | ▲ 1.5 | 1.0 | 1.6 | 2.1 | 4.9 | ▲ 6.4 | ▲ 2.6 | 3.0 | 0.7 |
| 輸出 | ▲ 2.1 | 7.2 | 1.3 | 1.2 | 2.1 | ▲ 9.9 | 12.4 | 4.4 | ▲ 1.2 | 2.1 |
| 輸入 | ▲ 2.4 | 5.8 | 4.1 | 1.7 | 2.7 | ▲ 6.3 | 7.1 | 7.1 | 0.8 | 2.1 |
| 実質域内総生産 | ▲ 4.1 | 2.0 | 1.3 | 1.3 | 1.7 | ▲ 4.1 | 2.6 | 1.2 | 0.9 | 1.4 |
| 民間需要(寄与度) | ▲ 4.9 | 0.8 | 2.0 | 1.1 | 1.4 | ▲ 4.3 | 1.4 | 1.7 | 1.0 | 1.2 |
| 公的需要(寄与度) | 0.7 | 0.4 | 0.2 | 0.2 | 0.2 | 0.8 | 0.4 | 0.1 | 0.3 | 0.1 |
| 域外需要(寄与度) | 0.1 | 0.8 | ▲ 0.8 | 0.0 | 0.1 | ▲ 0.6 | 0.8 | ▲ 0.6 | ▲ 0.4 | ▲ 0.0 |
| 名目域内総生産 | ▲ 3.3 | 1.9 | 2.1 | 4.3 | 2.6 | ▲ 3.5 | 2.4 | 1.9 | 3.7 | 2.6 |
| GRPデフレーター | 0.8 | ▲ 0.1 | 0.7 | 2.9 | 0.9 | 0.7 | ▲ 0.2 | 0.7 | 2.8 | 1.2 |
| 消費者物価指数 | ▲ 0.3 | ▲ 0.0 | 2.8 | 2.6 | 1.6 | ▲ 0.4 | 0.0 | 3.1 | 2.5 | 1.3 |
| 鉱工業生産指数 | ▲ 8.3 | 5.2 | ▲ 2.2 | 0.0 | 1.8 | ▲ 9.6 | 5.8 | ▲ 0.2 | ▲ 0.1 | 2.2 |
| 完全失業率 | 3.1 | 3.0 | 2.9 | 2.7 | 2.7 | 2.9 | 2.8 | 2.6 | 2.6 | 2.4 |

(注)単位%、完全失業率以外は前年度比伸び率。関西経済の2020-22年度は実績見直し、23-24年度は予測値。

日本経済の22年度までは実績値、23年度以降は「第143回景気分析と予測」による予測値。

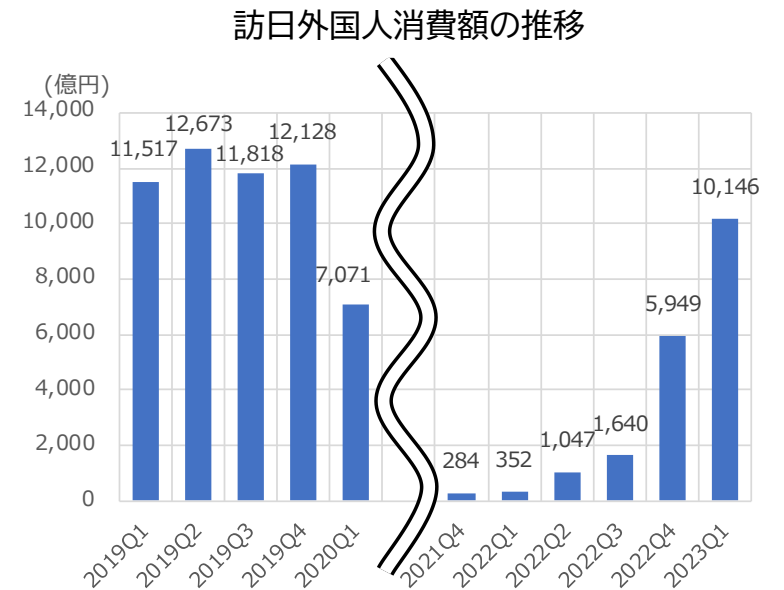
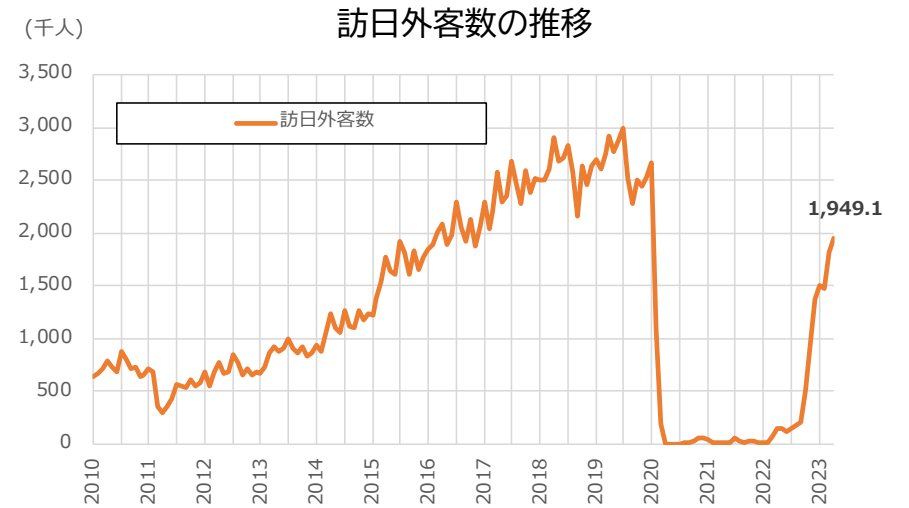
コロナ禍からの回復過程

- コロナ禍が始まった**2020年度**では、**全国**のGDPは19年度に比して-4.1ポイントの低下、**関西**(2府4県計)は-4.4ポイントの低下と、**どちらも大幅な落ち込み**
- うち、GRPの減少は**和歌山県が最も (-6.6ポイント)大きく**、京都府(-6.1ポイント)、大阪府(-4.6ポイント)、兵庫県(-3.5ポイント)、奈良県(-3.3ポイント)、滋賀県(-2.6ポイント)と続く
- **2021-22年度**については、**兵庫県、京都府、大阪府、和歌山県**で順調な回復。特に**京都府や和歌山県**では22年度において**急激に回復**
- 一方、**滋賀県、奈良県**においては他府県と異なり回復軌道に乗っているようにはみられず、**コロナ禍によるダメージから未だ回復しきれていない**



訪日外客数と訪日外国人旅行消費額の回復

- 4月の訪日外客総数(推計値)は194万9,100人と、200万人に迫る水準まで回復
- 四半期ベースで見れば、**2023年1-3月期の訪日外客数は479万427人となり(19年同期比-40.5%)、20年1-3月期(393万9,827人)の水準を上回った**
- **1-3月期の訪日外国人旅行消費額(速報、全目的ベース)は1兆146億円、2019年同期比-11.9%とコロナ禍前の9割近くを回復**
- 同期の訪日外客数の伸びが同-40.5%であることを考慮すれば、**消費単価(一般客1人当たり旅行支出)が着実に上昇**。この背景には**円安の影響**(19年1-3月期：110.2円/ドル、23年1-3月期：132.2円/ドル)や**旅行者の嗜好の変化**が影響しているようである



4. トピックス：急回復するインバウンド需要と関西経済

消費単価、平均泊数と国籍別関空入国者数

- 訪日外客の変化を消費単価と平均泊数で見れば、2023年1-3月期の消費単価は6万円強(19年同期比+43.8%)、平均泊数は5.4泊(同+63.4%)、それぞれ増加
- 関空への入国者数の上位5か国・地域別に、2023年1-3月期とコロナ禍前の19年1-3月期を比較すれば、韓国、台湾、香港、タイは回復傾向。一方で中国は大きく下回っている。結果、中国のシェアは19年の39.4%から足下3%に低下

国・地域別一般客1人当たり旅行支出及び
平均泊数(全目的):2023年1-3月

| ■ 1人当たり旅行支出 | | | | ■ 平均泊数 | | | |
|-------------|-------------------------|-------------------------|---------------|---------|-----------------------|-----------------------|---------------|
| 国・地域 | 2023年 1-3月期 (円/人) | 2019年 1-3月期 (円/人) | 19年同期 比(%) | 国・地域 | 2019年 1-3月期 (泊) | 2023年 1-3月期 (泊) | 19年同期 比(%) |
| 全体 | 211,957 | 147,413 | 43.8 | 全体 | 8.5 | 13.9 | 63.4 |
| 韓国 | 124,913 | 73,733 | 69.4 | 韓国 | 4.5 | 7.9 | 75.8 |
| 台湾 | 195,152 | 130,518 | 49.5 | 台湾 | 6.6 | 7.7 | 15.7 |
| 香港 | 253,311 | 164,813 | 53.7 | 香港 | 5.8 | 8.4 | 43.6 |
| 中国 | 746,591 | 218,362 | 241.9 | 中国 | 7.7 | 75.8 | 886.6 |
| タイ | 199,786 | 131,544 | 51.9 | タイ | 8.2 | 10.6 | 28.7 |
| シンガポール | 247,327 | 168,602 | 46.7 | シンガポール | 7.1 | 7.9 | 11.1 |
| マレーシア | 233,406 | 133,567 | 74.7 | マレーシア | 8.7 | 11.5 | 32.3 |
| インドネシア | 186,655 | 124,197 | 50.3 | インドネシア | 7.9 | 14.3 | 81.0 |
| フィリピン | 144,724 | 97,208 | 48.9 | フィリピン | 27.4 | 26.3 | -4.2 |
| ベトナム | 205,296 | 181,956 | 12.8 | ベトナム | 45.4 | 35.5 | -21.8 |
| インド | 206,970 | 140,663 | 47.1 | インド | 14.9 | 26.0 | 73.7 |
| 英国 | 277,229 | 186,026 | 49.0 | 英国 | 13.2 | 16.8 | 26.9 |
| ドイツ | 256,693 | 187,590 | 36.8 | ドイツ | 17.1 | 18.6 | 8.8 |
| フランス | 300,069 | 175,603 | 70.9 | フランス | 14.2 | 20.9 | 47.0 |
| イタリア | 275,293 | 154,456 | 78.2 | イタリア | 15.4 | 25.0 | 62.0 |
| スペイン | 284,951 | 171,348 | 66.3 | スペイン | 13.7 | 26.1 | 90.4 |
| ロシア | 233,265 | 141,467 | 64.9 | ロシア | 23.5 | 37.8 | 61.0 |
| 米国 | 264,289 | 168,409 | 56.9 | 米国 | 12.4 | 13.3 | 7.3 |
| カナダ | 193,745 | 160,972 | 20.4 | カナダ | 11.2 | 12.3 | 9.2 |
| オーストラリア | 358,476 | 245,533 | 46.0 | オーストラリア | 13.7 | 16.0 | 16.9 |
| その他 | 282,147 | 178,160 | 58.4 | その他 | 16.3 | 26.7 | 63.6 |

国・地域別にみた関空入国者数の比較:
2019年1-3月期vs.23年1-3月期

